
ネメシスと仲間たちが幻想入り

xhanku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネメシスと仲間たちが幻想入り

【Nコード】

N6098W

【作者名】

x h a n k u

【あらすじ】

目が覚めれば知らない森・・・そして知らない強靱な体と強そうな武器・・・とりあえず探索・・・そして・・・そこから始まった物語

この小説はBIOHAZARD x 東方Projectの二次創作です・・・駄文で初めて書いた小説です。ああ・・・あと、タイトル変えました。追記で、不定期更新です。

転生するまでの出来事（前書き）

- ・ この小説は”駄文”で、できており・・・下手すれば崩壊します・・・

転生するまでの出来事

(ん・・・)

ふと、目が覚める・・・

覚めた目に映ったのは日常の風景ではなく・・・真っ白い空間

(ッ！・・・これはもしや・・・ベターな展開か？・・・だとすればこの後は・・・)

「そのとうりじゃー!」

中途半端なところで年老いた声が聞こえた

(ああ・・・じじいか・・・)

「だれがじじいじゃい！わしゃじじいじゃないわい!」

(んなこと言われてもn・・・は?)

目の前には仙人のような・・・でも・・・どこかおかしいおじいさん
んがいた

「わしゃな！これでも若い方じゃわい！まだ成り立てのピッチピチ
じゃい!」

(・・・ヨボヨボの間違いでは?)

すると・・・おじいさんはブルブルと震えだし・・・

「おのれえ！貴様の転生先を考えるはずなのに、なぜ罵倒されにやあかんのらあああ！！！！」ボンッ

おじいさんから変な音と変な煙が出てきた。

そして、煙が晴れた先にいたのは・・・

（・・・？何やってんの？お兄さん）

自分より3ヶ月年上の兄がいた

「・・・もう疲れた・・・適当に転生させてもらっわ・・・」

（えッ?!）

兄がそういった後、突然まぶたが重くなった。

意識が無くなる前に見たのは・・・頭を抱えた兄だった・・・

転生するまでの出来事（後書き）

ありゃりゃ・・・プロローグはこんなのでいいかな？

転生先はネメシス（前書き）

尚・・・この小説は駄文でできてゐるゆえに・・・

転生先はネメシス

（ん・・・ここは・・・）

目が覚めれば知らない森・・・

（はて・・・兄さんは何故頭を抱えていたのだろう・・・）

こんな状況でもまったく関係の無いことを考える・・・

（そついや・・・名前なんだっけ？）

ここでふとそんなことに気づく、

ここに来るまでの経緯で、まったくもって自分の名前が出なかったことに少々驚きつつ、考える。

だが・・・

（全然思いつかないや）

名前を考えることを諦めて、今度は自分について調べること・・・

(なん・・・だと・・・)

自分を見てみると

・強靱そつなちよつとムキツつとした体

・ちよつとカッコイイ ロングコート

・ロケットランチャー・ガトリングガン

・手の中にちやつかりと隠れてる棘

・・・うん、ネメシス追跡者・・・

あのバイオハザードプレイヤーを苦しめたあの”ネメシス追跡者”

(あのトラウマとも言えるストーカーか・・・だが何故自分がネメシスに?)

ふと、兄の「適当に転生させちゃえ！」的な発言を思い出す・・・

(なるほど・・・)

若干怒りを覚えたネメシスは適当に発散できるものを探す

「ガサガサッ」

「グオオオオオオオオオオオッ!!」

ちょうどいいタイミングで巨大な熊が現れた

(ウホッ! いい熊ッ! ちょっと発散させろおおおお!!!!!!!!!!
!)

「ウワアアアアアアアッ!!!!!!」

この日、山中に、鬼熊と得体の知れない者の雄たけびが響き渡った

「ハア・・・ハア・・・殺った・・・のか？・・・ハア・・・ハア・・・」

雄たけびを合図に始まった戦い・・・

ネメシスは腕と腹に爪の傷跡がついている

しかし、鬼熊の方は右腕と左足が無くなっており、下あごは180°曲がっていた。

（だが・・・後もうちょいで完治するだろ・・・）

ネメシスは休むことにした・・・

十分後

いくら待っても人間と同じ再生力

三十分後

未だに人間と同じ

それに、空腹感もある・・・

仕方なく先ほど倒した熊の腕と足を捕食すること・・・

すると、再生力と体力と筋力が上昇した・・・

どうやら普通のネメシスではないらしい・・・

倒した相手の一部を食べば、何かしらを得るか、上昇するかわつぱい。

だが、全体ではどうなるか・・・試しに捕食してみた

結果

食べる部分が増えたため、更に上昇した

ネメシス（仮）は、完治した後・・・寂しくなったので森を抜けようとちょっと進むことにした。

転生先はネメシス（後書き）

名前エ・・・

神は言っている・・・ここで落ちルノだと・・・（前書き）

駄文ですけど・・・何か？

・・・そついや執筆中小説ってとこ、何も無かったな・・・

神は言っている・・・ここで落ちルノだと・・・

しばらく森を進むこと約180分・・・巨大な湖に到着

「でけえ・・・」

あまりの大きさに開いた口が塞がらない

そしてここで、頭に何かが伝わる

(話をしよう)

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

・・・突然青年の声が聞こえてきた

(あれは今から3m「お前誰だよ・・・」・・・いや・・・1万4
s「誰だよ?」・・・)

とりあえず名前を聞き出すことにする

(私には72通りの名前があるから・・・なんて呼べばいいか・・・

・
)

「・・・」

とりあえず待つことに・・・

(・・・まあいい・・・私にとっ「よくねえよ!-!」「)

スルーされそうになったから阻止!

(ハア・・・神だよ・・・)

「紙?」

(神だ!)

「なんと!」

自分・・・どこぞの宗教者じゃないのに神の声が聞こえるなんて・・・
・ありがたやあ・・・

(これからその体について説明する・・・けど・・・)

「ん？」

（そんな装備で大丈夫か？）

「何故？」

（この世界では”弾幕ごっこ”という遊びがある・・・その中にスペルカードってのがある。）

「ふむ・・・」

（その”弾幕ごっこ”ってのは・・・）

なんでも・・・相手が倒れるまでボコリ合う遊びだとか・・・負けた方は勝者に従う・・・そうだ

（それでだ・・・お前にスペルカードを追加してなかった・・・）

（ちなみに、そのガトリングとロケットランチャーは弾が切れないし、

ロケットランチャーにいたっては誘導性もある。）

「なん・・・だと・・・」

（だから・・・必殺技決めるために・・・どんなスペルカードがいい？）

「一番いいのを頼む」

（・・・じゃあ、無し）

「なに？！」

（どうした？・・・私のサポートが心配なのか？）

「いや・・・ハア・・・」

（ちなみにスペルカードなんて名前言って適当に弾ばら撒ぎやいいよ）

「そうなのか？」

（そうだ）

「・・・わかった。」

（それで・・・その体は・・・）

長いので省略すると

・捕食するとちょっと経験地っぽく何かが上がる

・このコートは防弾でも無いから捨ててもいい

・形態は自由に変えることができる（1と2は楽だが・・・3は時間がかかる・・・つまり正常・触手はすぐ変形できるけど巨大な怪物は時間がかかる）

・会話できる喉と、自我、前世と同じ思考回路がある。

らしい・・・この後、脳内テレパシーは終わった。

（さて・・・どうしようかな・・・）

「神は言っている・・・全てを救えと」

「ッ?!」

声のした方に振り返ると、青を基準にした色のちっちゃい子が浮いていた・・・

「神は言っている・・・アタイは天才だと・・・」

「・・・」

どうやら何らかの影響で狂ってしまったらしい・・・

「アタイは言っている・・・天才は弾幕ごっこで勝つのだと・・・」

ちょうどいい機会だから弾幕ごっこを試みることにした。

神は言っている・・・ここで落ちルノだと・・・（後書き）

P E P E P E P E P E・・・ピッ！

ああ・・・やっぱり・・・今回も駄目だったよ・・・俺は文才が無いからなあ・・・

そうだな・・・次はこれを見ている奴に・・・聞いてみるよ・・・（いないと思う）

戦闘描画かあ・・・難しそうだな・・・

初めての弾幕ごっこ(前書き)

はじめての弾幕ごっこ

前書き ああ・・・テスト(15・16)終わったあとエターナル
シティー2やりこんでたwww・・・すんません・・・って・・・
誰に謝ってるんだろ・・・俺

初めての弾幕っつこ

とある大きな湖の端にて

(目標〃 〃スター〃・・・)

「スタアアズ！」

「フン！そんな叫び声出して、アタイの強さがわかってるのね！」

(ありや？・・・なんか青少女が凄い・・・大抵は咆哮で怯むのに
(鬼熊とか))

そんなことに関心を持ったネメシス

(・・・まあそっちの方が好都合だ！)

だけどそれでもちよつと余裕そうなネメシス

でも・・・チルノはというと、こちらに手のひらを向けている・・・

「これでも喰らええ！」

突然チルノが小さな氷の粒を出してきた・・・しかしその氷もただの氷ではない・・・

先端が尖っていて貫通性を備えていて、後ろの方はコントロールをよくするために大きくなっている

・・・しかもその氷が数百・数千個とこちらに向かってきている

「なん・・・だと・・・まともに喰らったら蜂の巣じゃねえか！」

対するネメシスはガトリングをその氷の大群に向けた

そしてトリガーハッピーのごとし、まばらにばらまいた。

「うおおおおおおお！！！！！」

ガトリングガンからものすごい弾が発射される・・・

ほとんどの弾は外れて空を切るが・・・それでも弾はデカくて強い・・・

当たれば粉々・・・かすればその部分の大半を削り取る。

「な、なんなのよ！その弾幕は！」

流石にこれには驚きを隠せない青少女

「ふ、フン！まだよ！」氷符「アイシクルフォール」」

今度は左右に氷が飛ばされて、徐々にこちらに近づいている
しかも真ん中からもチルノを中心にして氷が飛んでくる

「おい……さっきまでのデタラメなのと違うじゃないか」

どうすればいいか考える……考えてるとき、ふと頭に文字が浮か
び上がる

「追跡する程度の能力」

「Amen!」

ズドンッ!

弾頭はそのままチルノに向かって・・・

爆発した

「うわあッ!」

「チェックメイト・・・」

湖に落ちていった。

「あ……名前どうしよ……なんかカッコイイ名前がいいな……」

そんなことよりも名前を気にするネメシス（仮）がいた

初めての弾幕ごっこ（後書き）

後書き 名前：ネメシス（仮）

スペルカード：追跡「死の予言」
チェイス タナトスプロフェシー

相手の名前・攻撃・行動を理解する・・・そして
死を^{まけ}プレゼントする

アサシン ファンタジアチェイス
暗殺「幻想追跡」

相手の臭いなどを分析して光として対象を追跡する

今のところこんな感じかな？・・・不定期更新になっちゃったw
誰か名前を俺に分けてえw

森の中にいざ！出陣！・・・の前に・・・（前書き）

やっとMY PC 帰ってキタアアア！！！！

つてなわけで投稿

・・・まさかこの小説が評価されてるなんて知ったときは嬉し涙出
たWWW

森の中にいざ！出陣！・・・の前・・・

T・N・E・M・S・I・S・C Side

「アタイを弟子にして！」

えーつと・・・現状報告します

チルノズドンツ！ 湖に落ちルノ 余裕がましてた矢先に目の前に？ 「強いから弟子にして」by？

で・・・その弟子弟子C a l l がものすくしくつこい・・・

「アタイを弟子にして！アタイを弟子にして！値をデシにして！アタイを出汁にして！・・・あれ？」

そしてこいつは狂っていたわけではなく、ただのバカだということも分かった・・・

「アタイを弟子にして！アタイをd「あああ！もう！嫌だつてb」その”呻き声”はいいつてことだよね！」

えっ？今なんて？

チルノ曰く^{いわ}・・・

・喋ってるのは全て呻き声

・「スタアアズ！」って雄たけびは物凄くかつこよかった

・自分を撃つ時も呻いていたけど・・・何かしら知らない言語も聞こえた

チルノに辛い現実を教えられた今、どうしようか考え中である・・・

「ガサガサッ」

そんなとき、後ろで誰かの近づく気配がした

(！)

メタ○アの蛇を見つけたかの如く、頭の上に太い赤いビックリマークを出しながらそちらに銃を向ける

だが・・・出てきたのは人間

「ひ、ヒイ・・・新手の化けモンだあああ！……！」

・・・それもこの辺に住んでいるようだ・・・ちょっとばかり追跡しよう

なんせ俺は”^{チェイサー}追跡者”だから・・・

そんなことを考えた自分を殴り返したい・・・

「全員！この村を守るんだ！それに”慧音”さんもいるから百人力だ！」

なんでもこうなる・・・

K e i n e S i d e

（なんだ、あの化け物は・・・）

人里の入り口で、戸惑っている様子を表しているネメシス・・・しかし、その行動は逆に威嚇しているように見える・・・

「ウウウ・・・オウ・・・ウアオウ・・・」

何やら話しかけているようだが・・・どうしても呻き声になっている・・・

（もしか・・・？）

「皆の者！武器を収めろ！そしてその化け物に紙と筆を与えてみよ
」！」

一か八か・・・

T・N・E・M・S・I・S C Side

なにやら村人が武器を収めた・・・

その行動に胸を撫で下ろす仕草をしようと思ったが・・・誤解され
ると思うのでやめた

そして紙と筆を渡して来たのでその紙に挨拶でも書いて見せた

「Hallo」

しかし・・・ここは”幻想郷”という場所であり自分のようなものを”外来人”なる者だということを知らない彼は・・・後悔した

ザワザワ

「おいっ・・・あれって外来人か？」

「だとしたら・・・でも外にも化け物っていたんだな」

「外って饅頭とかおうどんあるかな？」

そんなざわついている中・・・気配を探っていなかった自分が悪かったのだろう・・・

後ろで”RPG-7”という対戦車ロケットランチャーがこちらに向けられていたことに気づかず

パスッ！と小さな音がしてわずか3秒、自分の胴体に弾頭が刺さり・・・破裂した・・・

しかも自分は普通のとは違って育成型・・・それなりの再生力は上がったから死にはしないが・・・

力も無く、地にひざまついて、そのまま無力に倒れた

「フハハハハ！！アンブレラのゴミがここまで来るとはなッ！」

そこには、謎の白衣を着た20半ばの男が興奮した目でこちらを見つめていた。

森の中にいざ！出陣！・・・の前に・・・（後書き）

・・・なんぞ？この駄文

ってなくらいひどい有様になってしまいました・・・ハイ・・・

なにかしら思いついたので途中でこの続きが消えてしまったwww

ありや？・・・これじゃあ言い訳か・・・まあ何とか修正加えてみる（ネメシスに）

とある地下施設にて（外話）

Side ???

「ニコライ君・・・いったい何が・・・」

「見ての通りだよ・・・セルゲイ大佐・・・あのms・パープル嬢にハメられたのさ・・・」

「クツ・・・（家族が一人消えてしまった!）」

数時間前の出来事

「スバラシイ・・・これぞ究極の生物兵器（B・O・W）だ・・・」

何かとても欲しかった物を買って与えられた子供のように目を輝かせながら言っているとある兵士

「クツフッフ・・・これで”イワン”たちに新しい家族が加わるな!」

「それは光栄ですね、大佐」

それに続くところ兵士

二人は常に”死んでいる”はずだ・・・しかしながらも生きているのは、とあることがあったからだ

そのとあることは、また後に説明する

二人の前にあるのは、デカデカとした防弾ケースの中にいる特殊な”ネメシス”

「育てるのがたのしみだよ・・・」

このネメシスを作り出せたのは、とある天才学者”M S・パープル嬢”が手伝ってくれたからだ・・・

そして二人が去った後に、何者かが侵入してネメシスを持っていき、現在にいたる

無論・・・こんなことができるのは、皆さんご存知の通り、あの”スキマB B A”d（ピチューン

「・・・クツ！」

とても悔しさなどが抑えきれないセルゲイ

「・・・まだあの資料は残っていたはずですが・・・それを元にまた作ってもらっては・・・」

それをなだめようとするニコライ

「また作れだ！？！家族は一方も欠けてはいけないんだ！殺されるならともかく、奪われただぞ！？」

だがそれも逆効果になっている・・・

「だが・・・」

「いいから探すぞ！」

こうしてヘリポートに向かった二人だった・・・

とある地下施設にて （外話）（後書き）

・・・短すぎて話にならねえ・・・これじゃあ読んでくれた人になんて言おう・・・

ちなみに”後に”ってのはこのこと

セルゲイはウエスカーに殺されたけど、すぐ後に復活してスキマ送りって感じで

ニコライはB・O・Wに殺されたけどTに感染して復活・・・しかも普通のゾンビではなくね・・・まるで吸血鬼に従える狼男のようにWでもってスキマ送り

こんなかんじかな？

・・・ちょっとした設定説明（現時点）（前書き）

やっべ・・・これ見ない方がいいかも・・・ってかこれ消したほうがいいのかな？？

・・・ちよつとした設定説明（現時点）

ここまでのストーリーまとめ

とある男が転生（？）してネメシスに

そのネメシスがいろいろと説明を受けるけどデマも多い

ネメシスが散策中にチルノと会って、チルノと戦う

チルノに勝つけど弟子にしてとせがまれる

せがまれながらも無視しつつ先に進んでいくと、村人に会う

村人を追跡ストーリーしていると”人里”に着く

人里では、新手の妖”醜鬼きじゆし”と名づけられ警戒されてしまう

慧音がとあることに気づき、紙と筆を渡すが、ネメシスは外国製のために、英語で書いてしまう

村人は外の人だということに気づき、武器を収めるが警戒を怠らない

そんなときに背後からウィー・・・研究員にRPGを撃たれてしまう
（現時点はココ）

こっから先はもう思いついてるから今日中に何とか書くよ

で、その他で表現するんだけど・・・ニコライとセルゲイの説明は表現しにくいからここで書く

（ネタバレ注意！）

ニコライはジルと交戦中にB・O・Wに殺されるんだが・・・その後奇跡的にTとの融合に成功して洋館にいた不死存在の・・・誰だっけ？・・・あ！リサ・トレヴァーだ！

そのリサと同じ感じになって、復活・・・だけどスキマ送りでのこの地下施設に・・・

セルゲイはUESCAと対戦してて首を落とされて、敗北・・・その後首と共に地下施設へスキマ（ry

きつと現地にいた対バイオテロ部隊も不思議に思わなかったのは着く前にスキマ送りされたからでしょう・・・

その後、Ms・パープルなる紫が、首と胴体を繋げて復活させる・・・

・

そして、セルゲイとニコライの関係性だけど・・・アンブレラクロニクルズやってた人は分かるかも知れないけど・・・実は手紙を回すほどの仲だったんだよねえ・・・

で・・・外話を簡単に説明する

セルゲイ及びニコライをスキマで幻想郷に作った地下施設に送る・・・
いや・・・無理があるな・・・

セルゲイ及びニコライをスキマで幻想郷に送って・・・新しく土地を作ってスキマ送りした研究施設に送った・・・無理やりながらもこれでいいかな？

そこで、Ms・パールの送ってくれた余りの被験体でイワンとイワンの新しい兄弟を作ることにしたセルゲイ・・・しかし、研究員などが足りない・・・そこでまた提供してもらうことにした・・・

そして・・・イワンたちは先に完成したけど、その兄弟をどうしようか迷う羽目に・・・

そんな中、ニコライがラクーンでの出来事を思い出して、ネメシスではどうか？と・・・

セルゲイはその提案に大賛成・・・なんでも

「すばらしいぞ！私の家族は恐れを知らない！」
らしい・・・正直よくわかんない・・・

だが、その提案でセルゲイは
「できれば育成できるのがいいな・・・なんか・・・レベルアップとかありそうな・・・」

その発言にニコライと、この会議（？）に参加していた研究員の責任者たちは目を見開いて驚いた
なにせ、”あの”セルゲイがこんなことを知っているなんて予想することもできないからだ・・・

そこで、一人の研究員が

「じゃあ、人間の機能をちよつと向上させたようなネメシスはどうでしょうか？」

と言った・・・その発言にセルゲイはまたも

「すばらしいぞ！それでこそ私の家族にふさわしい！」

と・・・意味不明なことを言っていた・・・きっとそれほど楽しみなのだろう

しかし・・・このような実験はあまりにも難しかった

なにせ、ただ言うことを聞いてくれる殺人兵器と違って、まるで育成ロボットの生物型・・・

つまり、人工ペットのようなものを作れと言っているのだ・・・

作成していて、被験体のおよそ2/4を使った時の事・・・ついに一つ完成した・・・

（外話）

これにはセルゲイは大喜び！

ニコライもちよつと喜んでいたりする・・・

（外話）

しかし、あるうことかその成功作を盗まれてしまう！

可能性的に考えて、あのスキマBB（ピチューン

そのことでセルゲイは大激怒！

しかし、ニコライは焦った・・・何せ命を救ってくれた恩人（？）

しかもそいつはこの世界の創造者

勝ち目など無いし、恩知らずと思われてしまう

そのことでなだめようとしたけど、セルゲイは一向にやめてくれない・・・

そしてヘリに乗って幻想郷を探しまわることに・・・
(いまココ)

・・・サーセン・・・俺はこんな文が限界みたいです・・・サーセン・・・ごめんなさい

次にネメシスのスペックだね

死後(爆死後)のネメシスのスペック調整

名前：ネメシス C (誰か名前提供お願いします)

腕力：タイラント量産型並

脚力：タイラント量産型並

筋力：タイラント量産型並 + 3

速度：タイラント量産型並

体力：タイラント量産型並 + 3

再生力：人間とB・O・Wの中間並 + 1

知能：人間

自我：人間

会話力：ゾンビ並 たまにネメシス

・・・つまりほとんど量産並みだけど、鬼熊から貰ったので体力と

筋力が上昇・・・尚、10になるとランクアップ

スペルカード能力のバグ修正（爆死により神がバグ修正）

チェイス タナトスプロフェシー
追跡「死の予言」

- ・ 敵の弾幕を覚る
- ・ このスペルの弾幕は祈りを唱えた後に攻撃すると大打撃を与えられる（謎）

この弾幕は、真っ直ぐに飛ぶように見せて、油断させた後に後ろからUターンして誘爆ホーミング
祈りを唱えた場合は、ホーミングしないため・・・ちゃんと狙う必要がある

- ・・・名前は適当・・・かも

アサシン ファンタジモイス
暗殺「幻想追跡」

- ・ 速度が金髪タモリ並になる
- ・ 自分の能力「追跡チェイスする程度の能力」の効果範囲などが、伸びる
- ・ このスペルでの弾幕は、近距離（2・5m）までしか届かないが、攻撃力は絶大（？）

この弾幕は、ネメシスの腕の中にある棘が主な攻撃・・・一応トウイルスは抗菌されているため、ありません

タイラント
暴君「強者の咆哮」

・この辺の説明は、特に無し・・・ただ、このスペルは咆哮をする

このスペルの弾幕は、放射線上海に出てくる・・・

1つの弾幕から2つに、4つに、8つに、と鼠算に増えていく

次は能力について

『追跡する程度能力』

これは・・・ある意味チート？

まず、目的を見失わない・・・暗いところでは青白い光として・・・
明るいところでは赤い光として表　　示される

追跡できるのは、とにかくなんでも・・・

こんな感じかな？・・・以上！！

・・・ちよつとした設定説明（現時点）（後書き）

・・・よくわかんない・・・これじゃ読者が減りそうだ・・・
まあ後々また書くかも知れない・・・

知らない天井とかセルゲイとか（前書き）

あああああ・・・一人称だけになってしまった

知らない天井とかセルゲイとか

ふと目が覚める・・・

だけどもなぜこんなことになっているか理解しにくいため

さっきまでのことをちよつと走馬灯のように繰り返してみる

1 村人を追う

2 村人に囲まれる

3 R P Gで撃たれる

(・・・よくわかんねえ・・・)

「お？目が覚めたか！」

ふと近くで女性の声が聞こえる

「シシヨーはサイキョーだからね！ゼツタイ死なないよ！」

それと幼い声が聞こえる

その声はきつと・・・いや・・・絶対チルノだろう

「ありがとう」

上半身を起こしてお礼を述べた

届かない・・・そう思いつつもせめて御礼だけは言っておかないと・・・そう思っただけで発した言葉だが

「なッ！喋れるようになったのか！」

（はい？俺の声って呻き声なんじゃなかったっけ？）

「シシヨーが喋った！」

（・・・どういうことだ・・・？）

まさしく謎だ・・・森にいた頃は呻き声だったのに、それに・・・

「チルノ・・・お前いつからいたんだ？・・・あと、俺は師匠になった覚えは無い」

チルノだ・・・村人を追跡しているときにはいなかったのに・・・
いったいどこから

「ああ、チルノは寺子屋に来たんだが・・・お前の騒ぎで抜け出したんだ・・・なんでも『シヨー！』なんてシヨーの半分が無いの？』って言うてな、お前について来たんだ」

「なるほど・・・」

「あと、村人たちは処分しようと思っていたけど、チルノが『シシヨー』はサイキヨーだから休めば復活するもん！』って言うてお前の処分を阻止したんだ・・・それがまさか・・・ほんとに復活するとはな・・・」

その話を聞いたネメシスは、あとで何かしてあげることにした（師匠になる以外）

「ああ！そうだった、自己紹介が遅れたな・・・私は上白沢 慧音^{けいね}だ、この人里の守護者と寺子屋の先生をやっている・・・お前は？」

「俺は・・・名前なんて無いが・・・なぜかこの世界に来ている、というよりここどこだ？」

自己紹介とも言えないことをして、質問を試してみる

「ここは幻想郷だ、妖怪や人間が共存している場所さ」

なるほど・・・と頷いた

それならチルノのような妖精や怪物フェアリー モンスターがいてもおかしくないからだ

「人里の他にも、妖怪の山、旧都、マヨイガ、霧の湖、紅魔館、冥界・・・他にもいろいろある」

(・・・何このファンタジー)

今言われた場所の中には不思議な箇所が多かったため、こんなこと言えないわけがない・・・

そんなことに驚いていると、ドタドタと廊下を駆けてくる音が近づいてきた

「た、大変です！慧音さん！」

「廊下は走るな！」

見たところ・・・ただの農民のようだ

「すみません……って！そうじゃなくてですね！空から鉄の馬車のようなものが降りてきたんですよ！」

「何?!」

(鉄の馬車……?……はて……なんだろうか)

”鉄の馬車”これに突っかったネメシス

「すまないが、話はあも「いや！俺も行く！」ッ！おい！体のほうは大丈夫なのかッ?!」

突然立ったことに驚く慧音さん
ただネメシスは、さっきのやつが……もし人間に害を成したら
と思うと休んでいらなかった

「体は大丈夫だ……それより、俺の装備はどうした？」

「あの変な鉄の棒みたいなのか?……あれならお前の足元にある
が……」

足元にあった

地对空ミサイルロケットランチャー「スティングー」と
重機関銃「M134ミニガン」を背に担ぎ、騒ぎの元に向かった

騒ぎの中心には、「ブラックホーク」というヘリが停まっていた
そしてそこには

「見ろ！ニコライ君！あそこに私の家族がいたぞ！」

「そうですね、セルゲイ大佐」

嬉々としているセルゲイ大佐と、憂鬱感が漂っているニコライがいた

「我が息子よおおおお！！！！！！」

そしてセルゲイは両手を広げてこちらに走ってきた

正直、なぜこの二人は生きていて、自分を家族と呼んでいるかが分からなかったネメシスは、

呆然と突っ立ったままおとなしく抱かれることにした

「会いたかったぞ！我が息子よ！」

そしてこの威勢の無さと、重度の親ばかっぽさを漂わせている人は、知らない人が見れば『何あの親ばか』で済むが、本来のセルゲイを知っている人たちから見れば『あ、あのセルゲイ大佐はどこに行った』などというキャラ崩壊に頭を押さえかねない

偶然にも人里の人たちは、かの「バイ〇ハザ〇ド」を知らないわけ
で・・・

「微笑ましいなあ」

「いいなあ・・・あんな父さん」

など、羨ましい視線でこっちを見ている・・・しかし

（なぜ誰もこの”人間と化け物”の親子関係をおかしく思わない・・・）

そう・・・セルゲイは人間であり、ネメシスは”生物兵器”である・

「セルゲイ大佐・・・そろそろ戻りましょう」

そんな疑問を抱いていたら、ニコライが帰りたいと言った

「まあ、そう急かすな・・・せつかくの親子の再会だ！今日はちょっとした”会話”でもしようかね」

「ッ！大佐！まだ仕事ですよ！」

セルゲイの会話という単語にニコライはものすごい反応を見せて、それを阻止しようとした

「まあいいじゃないか・・・そんなならお前も来い！というか命令だ！」

このやり取りが普通の若手社員と、中年上司なら分かるが・・・二人はおっさんだ。

ニコライは白い髪をオールバックした髪型と数々の修羅場を抜けて

きたような（事実にには抜けてきた）ゴツい顔

セルゲイも白い髪だがロン毛だ・・・そして顔もニコライよりちょっと優しそうな顔だ

「ですが・・・」

「これは”命令だ”と言ったぞ？」

「そう・・・でしたね！」

セルゲイがニヤけながら言うと、ニコライの憂鬱感がふつとんで嬉々としたオーラが漂った・・・

どうやらこの世界では、軍人もクソも無いようだ・・・まさに幻想郷

「そうと決まればその辺のカフェにでも行こうかね！」

「了解です、ニコライ大佐」

それで話が終わったようだが・・・まだ付いていけてない・・・というより付いていけなかったのが
一匹

「あの・・・一体どこに行くんで？」

ネメシスは聞いてみた

「何を寝ぼけたことを言ってるんだ？お前が帰ってきたから祝うんだよ！」

セルゲイは迷い無く答えた

「またせたな！一体どうな・・・って・・・なんだこれは？」

そこに慧音さんがやってきた

そしてただ一人だけこのカオスに気づいた

「おお！美しい方もいるじゃないか！一緒に飲まないか？」

その慧音さんに誘いをかけるセルゲイ

「あ・・・ああ、ああ！いいだろう！私も話があるのでな！」

突然相手に誘いを受けた慧音さんは戸惑いながらもその誘いに乗った

「よし！じゃあいい店を紹介してくれ！」

「わかった！私の知っている団子屋に行こう」

こうして、セルゲイ一行は、ネメシスの背中にくっついていく氷精といっしょに団子屋に向かった

あと、セルゲイ達が去った後に、ブラックホークを興味津々の目で見ていた河童がいたとか・・・

知らない天井とかセルゲイとか（後書き）

- ・ 駄文・・・だね・・・あとセルゲイとかキャラ崩壊しちゃってる・・・

紅魔郷異変までの出来事（前書き）

えつとね・・・まあがんばってみるよ^^
ちなみにまた一人称だよwww

紅魔郷異変までの出来事

「いやあ上白沢殿はこの守護者であつたか！それにしても美しいお方だな！」

「かたじけない・・・そんな褒め言葉を言ってもなにもでないぞ？」

「いやいや、現に美しいお方が出ているじゃあないかあ！ワッハッハ」

現在団子屋でくつろいでいるところだ。

慧音さんは三色団子

ニコライは餡団子

セルゲイとチルノは、みたらし団子

ネメシスは緑茶

このメنزでこんなところでこんな風に食べたり飲んだりしている風景はどこかカオスだろう
しかしそんな違和感もすぐに消えてしまう会話をしている

「しかし、そなたたちのような者たちがこの鬼の親だとはなあ・・・正直驚いた」

慧音は未だにネメシスが生物兵器という人工的に作られたものだと言っことに気づいてなく

自然に生まれたものだと思っている

「鬼？息子は鬼なんかじゃあない！私の息子さ！ガッハッハ！」

そしてこのバカことセルゲイも、どこかおかしい

「シショーは鬼じゃないよ！鬼はつのがあるもん！」

追跡者^{ネメシス}を追跡した？青幼女ことチルノは何かを間違えている

「……」

無言で団子を食べているニコライ
しかしその姿は物凄く様になっている

そしてその話の主人公はというと

「……（緑茶がうまい）」

緑茶を飲んでいた
しかもその緑茶で集中力がアップしている

団子屋はとてにぎやかになっていた

そして、団子屋での会話が終わった後の話

T · N · E · M · S · I · S C S i d e

団子屋での会話が終わって、慧音とチルノは帰って行った

（緑茶がうまかった、また今度寄ってみよう）

とても緑茶の味を気に入ったネメシス
そんな時、ふとニコライが言う

「ありや？なんか空が”紅い”ですねえ」

「ム？本当だな・・・だが夕暮れよりも紅いってことはどうい
うことだ？」

そんな会話を聞いてネメシスは視線を空に向ける

空の雲は霧のようになっていて、そんでもって紅い・・・ブラッド
カラーをちょっと鮮明にしたかのように

「セルゲイ大佐とニコライさん、ちょっとこの霧を出しているとこ
ろまで行ってみます」

ちよつと面白そうだったからそうしてみることに決めた

「ん？行くのか、だったら気をつけて行ってこい・・・あとでその
霧の出ているところにU・B・C・Sを送るよ」

セルゲイのこの言葉にネメシスはまたも驚いた

U・B・C・Sは、ラクーンシティへの導入でかなり失われて、
U・B・C・Sは消え去ったはず

アンブレラは1998年9月26日ごろ

非正規の私設部隊U・B・C・Sを4部隊200名をラクーンシティに投入した。

「市街地の掃討、市民（アンブレラ関係者を優先）の救助及び市外への避難」が目的だった。

生存者は数えるほど少なかったばかりか、苛烈な状況下において逆にU・B・C・Sが壊滅する事態に陥った。

また、U・B・C・Sの中には「監視員」と呼ばれる作業員が何人か含まれていて、彼らは「U・B・C・Sの監視および戦闘データの回収」「実験体のデータ回収」「証拠物件の破壊」が主な任務で、

アンブレラがU・B・C・Sを投入したのは監視員の任務を達成するためだ。

そんな感じの捨て駒扱いで大勢の兵士が死んだ

そしてこのU・B・C・Sを作ったのは、ここにいるセルゲイ・ウラジミール大佐だ！

（またこのような損失及び捨て駒をたくさん作るのか）

そう思ったが

「今回はMs・パープルの要望で作ったんだ、人材も向こうが提供してくれたしな

それに目的は前のような目的じゃあない！なんでも『日本の自衛隊のように幻想郷を守る軍隊を作って』と言われたからな」

そうセルゲイが言ったことで安堵したネメシス
その後セルゲイは、あと、と付け足して

「俺のことは父さんでもパパでもかまわんよ」

いろんなことがあった団子屋でセルゲイとニコライと別れて、霧の
出ている場所に向かうことにした。

紅魔郷異変までの出来事（後書き）

そついや・・・ネメシスの形態の説明してなかったよね？というよりネメシスの説明をするね

追跡者（Nemesis）

B・O・W・「タイラント」の性能向上のため、新開発した寄生型B・O・W・「NE-」、通称「ネメ시스」を寄生させた新型。基本性能はタイラントと変わらないが、ネメシスの寄生により知能が格段に上昇することで、「より複雑な任務を自己の判断で継続的に遂行」「ロケットランチャー等の武器使用」などが可能となった。また、回復能力の向上作用により、タイラントが危機的状況に陥る事によって起こる「暴走」を抑える役目も持っている。バイオ3では「S・T・A・R・S」の隊員及びその関係者の抹殺」を任務としてラクーンシティに投入されており、S・T・A・R・Sの人間であるブラッド及びジル、協力者であるカルロスを執拗に追いかける。この任務とネメ시스による知能向上により、「S・T・A・R・S（スターズ）」という言葉を発する。本作に登場するネメシスはNEMESIS-T型である。ジルとの戦闘を経て、3つの形態を見せる。

第1形態

追跡者の最初の姿。人間を大きく上回る巨体を持つ。全身に防弾・対爆仕様の黒いコートを纏っているが、これは暴走を抑えるための拘束衣という面も持っている。コートから露出した部分には、所々にネメシスの触手が巡る怪物じみた外見が確認できる。素早く走りまわり、突進しながら殴りかかる、ジルの首を絞めた後に投げ捨てるといった攻撃を仕掛けてくるが、たまに首を絞めたまま腕から触手を繰り出してくることがある。その硬度は人間の頭部を貫通する

ほどで、これを受けると即死してしまう。時にはロケットランチャーを携行して現れることがあり、ジルに向けて撃ち込んでくる。また、追跡者の至近距離からロケットランチャーや弾速の遅い銃（グレネードランチャー等）を発射すると、素早く横移動して弾丸を回避することがある。

第2形態

激しい戦闘により拘束衣は破れ、繰り返し与えられる肉体のダメージによりネメシス自体が肥大化、半ば暴走状態になりかけている。腕部を縦横に巡っている触手により武器の使用が不可能になり、より激しい攻撃性を示すようになる。即死攻撃が無くなり、攻撃力も第1形態より若干落ちているが、体力は高まっている。右腕から垂れ下がった触手により突いたり掴んで叩き付けたりといった攻撃をしてくるが、第1形態に比べ動作が大振りなので戦いやすい。

第3形態

度重なる戦闘と特殊な薬液により限界を超えるダメージを受けたタイラントの肉体とネメシスが、お互いに暴走状態になり肥大化。頭部や手足を失った肉体を異常発達したネメシス本体が補完し、仰向けの状態で四足歩行を行う。腹部からは巨大な肋骨が牙のように突き出し、薬液の毒素により巨大な水疱が浮き上がっている。最早知性を感じさせない外観になりながらも、任務遂行のためジルに迫ってくる姿はまさに「復讐の女神」の名に相応しい。触手による攻撃のほか、体液を飛ばして攻撃してくる。この第3形態はアメリカ軍特殊部隊がラクーンシティに持ち込んだ、コードネーム「パラケルススの魔剣」というレールキャノンを使わないと倒せない。

向かっている途中のお話（前書き）

原作キャラほとんど出てない・・・

向かっている途中のお話

T・N・E・M・S・I・S C Side

ネメシスは走る、霧の出ているところまで走る

途中いろいろな妖怪というものに遭遇した

だが歩を止めない

(目標地点まで 後 約・・・ ターゲット表示、・・・)

「スタアアアアズ！」

とにかく目標まで走る

もしかしてこれが何かの始まりだとすれば・・・

そう考えたネメシスは使命感に襲われた

(絶対に止めてみせる！)

S i d e o u t

G i n o v a e f S i d e

私は以前、U・B・C・Sに所属していた・・・しかし、そんなにいい物ではなかった

報酬金なども多くて昔は欲に目がくらんだが・・・今はそうじゃない俺は”ジル・バレンタイン”という女性と話していたら、ラクーンに投下されたネメシスに殺された

多分・・・仲間だと思われたのだろう

そして、死んだ後の私は公開した・・・欲は死を招くのだと・・・

そして私は反省した後に奇跡を体感した・・・そう”奇跡”だ

その”奇跡”で復活した私は、気づいたら地下施設にいた

そこには意外にもセルゲイ大佐もいた

そして、私はセルゲイ大佐に忠誠を誓うことにした

何せ彼も更正したようだからな

そして私はいま、M s・パープルが集めたという人材と共に、彼の
新しい家族の増援として霧の出ているところに向かっている

「ニコライ隊長おー、そっぴゃあのネメシスって一人で大丈夫ですかねえー」

ふと、昔を思い出していたニコライに一人の兵士が疑問を口にする
ちなみに、ニコライとその兵士は”UH-60ブラックホーク”という輸送ヘリに乗っている

そのヘリは全部で4機

他にも、そのヘリの護衛として5機の”アパッチ”という戦闘ヘリも着いてきている

「?それはどういふことかね?」

質問に質問で返すのはなんだけど、この場合は仕方が無い

「いや、ね、ここから霧の出た場所を探ってみたら”紅魔館”と言う場所にありつくわけで・・・」

そこまで行くのに結構距離があるんでさー」

それに、ともう一人の兵士が割り込んで続けてくる

「とある研究員が調べて分かった結果つばいんですけど・・・周りは妖怪や妖精が異常になっているそうです」
モンスター フェアリー

それを聞いたニコライは驚き、目を丸くした

そして無線機のマイクを手に取り、こう告げた

【総員、警戒を厳にしろ！そして、”死ぬな”】

ニコライは慧音たちの話やM・S・パープルが、妖怪とはどんなやつなのか聞いていたのだ

その説明を聞いたニコライはB・O・Wより恐ろしいということが分かった

S
i
d
e

o
u
t

S
o
l
d
i
e
r

S
i
d
e

現在地点、魔法の森

地上部隊の一人である機関銃士の拓郎^{たくろう}を主な視点とする

地上から紅魔郷に向かっている部隊は、ユニットが接続されている
ブローニングM2 .50重機関銃を持つフラットベッドハンビー

という装甲車で向かっている

その装甲車は全部で6機

その装甲車に乗っている兵士たちは皆真剣な面持ちで警戒している
何せ対人戦闘の経験は豊富だったりして意外に経験者揃いなのに相手は妖怪という化け物と来た

中には元USSや元UBCSもいたが、B・O・Wは比じゃないだろう

そんなとき、いきなり前のハンビーの速度が上がった

そしてそのハンビーから無線が入った

『こち・・・ルタフ・・・Stone・・・敵襲！・・・7時の・向！』

無線が故障しているのか怒鳴りつけているのか分からないが、途切れ途切れな無線をとにかく理解した

「総員！7時の方向に機関銃構えーい！」

無線で他のやつらに伝えた後に、自分も見てみることにした

そこには気色悪い甲羅のような胴体を何度もくつつけたような巨大な生き物がいた

それはジエームス・マーカスというおっちゃんの養成所にもいたという”大百足”がいた

「総員！速度を上げろ！」

やはり油断ならない敵がいた

S i d e o u t

魔法の森から

走る、走る！とにかく目標に向かう

そんな時

「お前は食べていいのかー？」

そんな声が聞こえた

だが目標まで向かうように設定されているため、聞こえないも同然無視しようとしたが、光の弾のような物を飛ばしてきたため、それを中断して避けた

「食べていいのかー？」

「プログラム変更、ターゲット”黒い少女”、敵とみなされる行為を行ったため、排除せよ」

「スタアアアアズ！」

「そーなのかー？」

謎の返答を返してくる黒ずくめ少女に、ネメシスは”ステインガー”を向ける

なにをするのか分からない黒い少女はただそれを眺めた

「チェイス タナトスプロフェシー
追跡『死の予言』」

だがスペル名を唱えたなら話は別だ

少女は咄嗟に身構え・・・ずに、手を十字に広げたままだ

「I judge the judgment on fools
dirtying an ideal of Eden with
h a r e p u t a t i o n o f t h e S t . M a r i a
」

少女はただ見守るだけ、だがネメシスは冷酷にもステインガーにかける指の力を強くしていく

そして

「A m e n !」

Aの掛け声と共にトリガーを引いた

黒い女の子は突然飛んできた弾頭に驚きつつ避けようと横にずれるが

「なんでこんなに大きいのだー?!」

そう、弾頭が予想より大きかったのである。

そのことで黒い少女の右腕に当たって破裂する

「目標の戦意喪失を確認、目標：紅魔館」

落ちていく黒い少女を放置して目的地に向かうネメシス

S i d e o u t

S o l d i e r s i d e

「走れ走れ！追いつかれるぞおお！！！！！！！」

そう怒鳴りつつも、周りの機関銃の音で掻き消される

魔法の森で遭遇した大百足が物凄く早いのだ、そして硬い

ブローニングM2 .50の弾がカキンッ！という音を出してほとんどはじかれる

たまにブシュッ！という音を出して当たることもあるがその被弾する場所がなかなか見つけれられない

「これでも食らえええええ！！！！」

隣から体を出して、” U S 2 2 - A 1 ” という最新鋭の4連装ロケットランチャーを大百足に向けている” ジョン”

そのジョンの掛け声と共に一つの砲筒から一発、他の砲筒からもう一発と飛んで行き、甲羅に一発当たったのはひびを入れるだけで、他の弾は見事大百足の繋がりに当たった！

繋がりに当たった大百足は分裂した

しかし、未だに行動を続けている

「なッ！効いて」

喋っている最中に繋ぎ目、いや、割れ目から出てきた液体によりジョンの上半身がジュワーという音と共に溶けた

きつと物凄い酸だったのだろう

ハンビーの床に落とされた武器とジョンの下半身

ジョンの下半身からは血液や、臓器といった物が出てこなかった

代わりに溶接でもされたかのように黒く焦げた瘡蓋かさぶたのようなものがあつた

武器もほとんど溶かされていて、使い物になりそうも無い

この恐怖を目の当たりにした拓郎は無線にこう告げた

『敵は強酸性の液体を放ってくる！繰り返す！強酸性の液体を放ってくる！一刻も早く抜け出すぞ！』

向かっている途中のお話（後書き）

ありゃりゃ？・・・どうしようか・・・

感想や指摘、アドバイスを頼む・・・

それとネメシスの名前提供も頼む

L e t、 s B a t t l e ！（前書き）

あああ・・・適当！戦闘描画がいいか悪いかがわかんね！

L e t、s B a t t l e ！

S o l d i e r S i d e

一体何発撃つただろう・・・

あの後、繋ぎ目にブローニングの弾が当たったら、簡単に倒せたため、それを無線で知らせて一時終戦になった・・・

だがあのようにカラス天狗の集団がやってきて、手に持っている剣や短刀で襲ってきた

無論、ただやられるわけにもいかなかったので機関銃で応戦する

しかしながら数が多すぎる

大体8発に一体仕留めるような感じで倒しているため弾も結構消耗する

なぜ8発かって？天狗が早くて狙いが定まらないんだ・・・それにさっきの八百足で一機のハンビーがやられた・・・

地上部隊はもう難しいかもしれない・・・

まさか妖怪がここまで強いなんてな・・・

そんな絶望を感じていたら、奇跡が起きた

『恋符「マスタースパーク」!』

掛け声の後に巨大な、かの”バラケルススの魔剣”のような太いビームが上空を占めていた

S
i
d
e

o
u
t

G
i
n
o
v
a
e
f

s
i
d
e

現地点：霧の湖

「隊長!」

突然さつき話しかけてきた兵士が声を荒げて呼んできた

「どうした?!」

「無数の妖精と妖怪の集団です!」
フェアリー モンスター

「なんだと?!」

ヘリのコックピット・・・ガラスの向こうには無数の妖精たちが飛んでいた

そしてなにやら小さい光が・・・

『ッ!総員避けるッ!』

無数のこの世界の”弾幕”というものが飛んできた、それはヘリが当たれば容易に墜落するだろう

『全アパッチ操縦者に告ぐ!戦闘に入れ!』

この場合は戦闘態勢に入れない、そのまま戦うしかない

こうして空中戦も繰り広げられることとなった

まず、アパッチが妖精のまとまっているところにミサイルをぶつ放す

そして機関銃を撃ちまくる

ブラックホークは内装されている機関銃で応戦したり、兵士が身を乗り出して狙撃したりしている

「いけええええ！！！！！！」

大方の兵士はそう叫んだ

そしてそのヘリとヘリの間を、紅と白の衣装に身を包んだ少女が飛んで行き・・・

『夢符「封魔陣」！』

その声の後に、妖精や妖怪が消えた・・・

S i d e o u t

T · N · E · M · S · I · S S i d e

しばらく走っていると紅い霧が濃くなっていって、紅い館が見えてきた

そして今まで無視して突破してきた妖精なども強くなってきた
そうなら無視するわけにもいかないのでM134で蹴散らしていった

そして館の門と思わしき場所に到着する

「ちょっと待ちなさい！」

そう言って攻撃を仕掛けてきた、チャイナドレス・・・以後”中国”

「私はこの門番よ！ここを通りたかったら私を倒してから行きなさい！」

そう中国は言ってきた、無論、邪魔をする場合は

「目標の侵害、ターゲット変更、”中国”、抹消」

「チャイニイイイイイイズツ！」

「ちょっと！なんで私だけそんな雄叫びなのよ！」

・・・どこで知ったか知らないが、その件について物凄く怒っている

とりあえずステインガーを向けて発射する

「ッ！危ないわね！」

中国が避けた後に門が爆発した、リーチとスピードで負けたのだろう
中国は弾頭をすばやく避けて、すぐ背後にあった門のせいで誘爆に
失敗

仕方ないのでM134に持ち替えて乱射しまくる

「ウヲオオオオオオオオ！！！！！」

勢いよく弾が出るわけだがほとんどが外れて壁に穴を開けていく

そんな流れ弾のうち一つが館の窓に向かっていた

ネメシスはその窓にある”者”を見つけた

咄嗟に危ない！と思ったが、弾が突然はじけた

窓を割らずにだ

そんなことを目の当たりにして呆然と立ち尽くしてしまったネメシス

「余所見とはずいぶんと余裕です！ねッ！」

ドガッ！と腹に一発蹴りをお見舞いされて、腕、脚と順番に攻撃されていった

中国は近距離戦闘が得意なようだ、そして脚が早いがために距離を置けない

アサシン ファンタジイ
「暗殺『幻想追跡』」

これを唱えた後に、腕の中にある棘が動き出した

これに気が付かない中国

今度は顔面に蹴りを入れようとしてきた脚をつかみ、その腕の棘を脚に突き刺す

「ッ！」

半径5センチもある棘を脚に刺されて驚きつつも、背後に交代する中国

そこにもまた棘を伸ばす

それに驚いてまた避けようとしたが、片方の足の怪我で少し遅れてしまう

「あッ！」

幸い避け切れたものの、肩に棘がかすってしまった

それで倒れてしまったところに、もう片方の棘を伸ばす

そして中国の腹を貫通させた

「うぐッ！」

幸いにも彼女は妖怪だったわけで、戦意を喪失したため、ネメシスはまた紅魔館に向かうことにした

L e t、 s B a t t l e ！（後書き）

・・・よくわかんね・・・博霊と白黒の普通の魔法使いさんを次には出せるようにしておくよ・・・

ってかネメシス冷酷化してる気がする・・・なんていうか、虐殺？w

それに兵士たちもさ・・・紅い霧異変を解決しに来たのに殺つちやあかんでしょw

（外話）妖怪の山・・・天魔の家にて（前書き）

天狗が来た経緯を語ります

ちなみにこの時って確か椋、及び、文はいなかったはず・・・

（外話）妖怪の山・・・天魔の家にて

妖怪の山

その中に一際大きな家がある・・・簡単に言えば屋敷、武家屋敷だ

その縁側に歩いている4本の羽を持つ”天魔”

ちなみに今の時間帯はネメシスが紅魔館に向かったあたり・・・

T
e
n
m
a

s
i
d
e

今日も天魔はいろいろな報告書の整理をしなくてはならない・・・

（あーめんどうだー）

内心ではそう叫んでいる天魔だが

「天魔様、よろしくお願いいたします。」

「ふむ、わかった」

さすがに部下たちの前ではカリスマを発揮する

そんな時

「おや？・・・おめーさん、今何刻かね？」

天魔は後ろについている部下に今何時か聞いてみた

「今ですか・・・はて、確か辰の刻でしたね、それがどうかなさいましたか？」

辰の刻とは、現代で言う4時で、まだ午後、つまりはまだ暗くなる

には早すぎる時刻

「じゃあよ、お前さんはあの空を見てどう思うよ」

「あの空とは・・・！これは異変ではありませんかッ！」

「だろうよ」

部下が慌ててるのに、天魔はなぜか落ち着いている・・・いや、微妙に息が荒い

（よっしゃ！これでちょっと休める！）

天魔はがんばって嬉しいのを堪えていたのだ

S i d e o u t

T e n g s i d e

妖怪の山にある、駐屯所

「ヤーツ！」

今度は天狗の”天さん”に密着！

天さんは、現在組み手で50戦中40連勝のサイキョーさんだ

「緊急事態だ！総員装備を整えろ！」

そんな中で、上層部に所属するお偉いさんが慌てた様子で入って来た

（異変？）

最初は疑問に思っていたが、自分は強いと思っていた天さんは、余裕を見せながら装備を整えに行った

そしてみんなが装備を整え終わった後に、駐屯所の門に集まった

そして上層部のお偉いさんがこう言った

「これより！異変解決に向かう！この異変に向かった君らの名は語り継がれるだろう！だが、犠牲もやむをえない・・・みななもの！心してかれ！」

『オオー！！..!』

上層部の語りかけの終わりに、みんなして威勢の良い声を上げた

「では、ゆけい！」

その声と同時に

ある者は怯えながら、ある者は支えながら、ある者は真剣な面持ちで向かいながら、また、ある者は

余裕な状態で向かいながら

そして、天狗は二つに分担された、魔法の森から行く者と、霧の湖で行く者で意見が分かれたからだ

天さんは、魔法の森から行くことになった

そして天さんの表情から余裕が消えた、向かっている途中で大百足の死骸がそこらじゅうに転がっていたからだ

大百足は決して弱くない・・・逆に強い方だ

そして、その大百足を倒した”奴ら”に遭遇した

最初は天さんも分からなかった、”奴ら”の持っていた筒の先から火が出るたびに近くの天狗が落ちていったからだ

そして、次第に自分たちを倒してくる敵だということを理解して、交戦に入った

（外話）妖怪の山・・・天魔の家にて（後書き）

・・・うまくかけない・・・

まとめ

ネメシスが紅魔館に向かつてある程度経った頃に天魔が異変に気づく
それから少し経った後に、駐屯所で説明や演説が行われ、天狗たちが
紅魔館に向かった

そして魔法の森を進んでいる時にU・B・C・S地上部隊に遭遇す
る、そして交戦に

こんな感じ・・・まあこの場合は、天狗が行くのがもうちよい早け
れば交戦に入らなくて済んだのかも・・・大百足を一緒に撃退して
いたかもだからねwww

ま、先に手を出したU・B・C・Sのせいなのに・・・天狗さん方・
・・・ご愁傷様

突撃！紅魔の異変さん！あと”G”（前書き）

・・・サーセン><

ってかいいい加減名前打ち込むの面倒だ・・・誰か名前提供して（ネメシスに）

突撃！紅魔の異変さん！あと”G”

T・N・E・M・S・I・S

門番を倒して破壊された門を抜けると、紅に染められた館が見えた

「悪趣味だなあ」

目的地に到達したネメシスは、新しい目標を探すべく、探索

(そついや・・・)

ふと、さっきの”者”を思い出す

金髪で赤ん坊の頭につけるような帽子をかぶっていて、背中に七色の宝石のついた羽を持っていた。

そして、手を窓の方にかざして・・・弾を砕いた

その謎の事にネメシスは考え込む、しかしあれが能力だとすると、例えば”破壊する程度の能力”ならば、はつきり言って脅威ではない。

そこまで考えたネメシスはターゲット目標を決めた

「ターゲット、七色の羽を持つ少女、目標表示、」

「スタアアアアズ！」

S
i
d
e

o
u
t

S
o
l
d
i
e
r

S
i
d
e

はつきり言って、むちゃくちゃだ。

「弾幕はパワーだぜ！」

我らが地上部隊は、白黒魔法使いに先導してもらっていたのだが、ほとんどの敵が来ない。

というより魔法使いがほとんど前に出る敵を倒しきっている

妖精などは出た瞬間に”弾幕”で倒し、集団で来てもすぐに倒すさっきのようなビームは出さないが、強すぎる

そのおかげで被害はハンビー一個と一人で済んでいる（「向かって
いる途中のお話」参考）

弾薬も消費しなくて済むので、まかせっきりにしている

これなら後もう少して合流できそうだ。

でもこの魔法使いの戦闘は無茶苦茶だ

S i d e o u t

G i n o v a e f S i d e

おかしい・・・この人間は人外（B・O・W）をも勝るとい
うのか？

さっきから紅白の少女が針やら紙だけで妖精や妖怪フェアリーモンスターを倒している

「ハアアッ！」

時には格闘もするが、一方的すぎる

やっぱりどこの世界でも女性というものは強いものだな

それに、彼女のおかげでこちらも助かっている。

さっさと大佐の息子殿に合流しなくてはな。

S i d e o u t

T · N · E · M · S · I · S S i d e

しばらく館に入っているいろと探してみたけど見つからない。

情報不足とネメシスは思っていたが、そうっぽい

ただ”見た”だけであってそれ以外の情報は何も無い

と言っわけでネメシスは結構探すのに苦労している

(どこだ、どこにいる！)

昔はよく『廊下は走ってはいけません！』と先生によく言われたものだったが、走らなければ一向に辿り着けない

そうやって走っていったら、グニャッ！と何かを踏んづけてしまった。

途中で走るのをやめて振り返ってみると、そこには、”G”の成体がいた。

追加で潰れた”G”の幼体も

〔目標追加、G成体の駆除〕

「グウウウウ・・・」

唸っているG成体

そのG成体に突撃していくネメシス。

ネメシスにも”Gウイルス”というのは入ってはいる・・・自分を除いて

Gウイルスというのは、アークレイの森だったか山にある洋館にいた、リサトレヴァーから発見されたものだ。

発見者は、Gウイルスの作成者である”ウィリアム・バーキン”だしかし、Gウイルスは”ハンク”という工員が奪ったもの以外はラクーンで処分（破壊）されたはずだ。

（Gはもう存在していないはず・・・）

なぜか少しバイオ知識があったネメシスはそこに気がついた

ハンクが奪ったGウイルスは処分されたはず・・・ということに

（なぜここにあり・・・あの白衣の研究員って、まさかウィリアムか！？）

しかし、ウィリアムがいれば話は別だ、あいつの血でまた作り出すことができる

それに、目の前の”G”も少し違っていた

腫れぼつたい半目の目に、長くて太い首、爬虫類と人間が合わさったような胴体、長い尻尾
それに付け加えて頭に”角”や体の外側のほとんどに”棘”がついている。

そして”G”特有の大きな”目”が腹に付いている。

（厄介だ、もう進化しかけていたか）

館の廊下で、突然風を切った音が聞こえた、そしてその後鈍い音が聞こえた。

「グフツ！」

「グウウウウ・・・」

いまだに”G”は唸っていたが、ネメシスは壁に叩きつけられていた。

長い間考え事をしていたので先手をとられたようだ

すぐさまネメシスは立ち上がり、M134ミニガンで”G”めがけて乱射した。

しかし、Gは大穴を空けられたり、腕を落とされても、また”再生”する。

落ちた腕からは、幼体も、うじゃうじゃ出てくる。

ふとネメシスは思った

(うじゃうじゃって、うまいのか?)

思い立ったらやってみるが吉、早速飛んできたGの幼体をつかんで握りつぶし、口にふくむ

意外にも、刺身のような味覚で感じ取れたGの幼体の肉は、ネメシスの腹に欲求を求めさせるハメになった

そして、次々と飛び掛ってくる幼体を握りつぶしては食べ、握りつぶしては食べ・・・

残るは成体だけとなった。

「俺の腹を満たさしてくれよ?」

「グウウウウ・・・ウウ・・・ウオオオオオ!!!!!!!!!!!」

突然叫びだして突進してくるGの成体

その突進を避けて、片手で首を掴む、そしてもう片方の手で首を殴

りまくって、時に膝で腹の目を蹴る

それを繰り返していたら、Gが動かなくなった。
そして肉を試食してみる・・・

「弾力性のある刺身つてのも、捨てたもんじゃないな」

満足感に浸った

完食した時に、脳裏に言葉が表示された

「Gを捕食、Gウィルスを確保、再生力が30上昇」

（これは、普通のネメシスを上回れたのかな？）

確実に再生力のレベルが上昇したネメシスだった

（これなら部位を破壊されても大丈夫だな！早速探しに行く！！）

「スタアアアズ！」

こうして、また廊下を走るネメシス

S
i
d
e

o
u
t

?
?
?

s
i
d
e

「ッチ、アンブレラのクズがッ！私のペットを食いやがってッ！」

ネメシスが去った後

Gの残骸に近づく白衣の男がいた。それに

「ウィル、仕方が無いさ・・・また別の機会を狙おう」

「・・・そうだな、アル」

サングラスをかけた白衣の男もいた。

突撃！紅魔の異変さん！あと”G”（後書き）

金髪タモリをとーじょーさせてみた。

だつて5で確実に死んでるしwww

まあ、悪役しか出していないねwバイオ組はwww

理解できなかった場面があった場合や、ネメシスの名前を思いついてくれた方

はたまたアドバイス、指摘、新しいスペルを思いついた方は、感想に書いてください・・・では^^

到着した増援、それと狂い（前書き）

・
・
・
ついにU・B・C・Sが紅魔館にINしたo・
・
・
よ！
W

到着した増援、それと狂い

G i n o v a e f S i d e

霧の湖を抜けた上空、そしてそこから数キロ進んだ先に目的地、および合流地があった

そこに、ある程度の隊員がラペリング降下をしていく・・・そして最後にニコライが降りる

そこには地上部隊も常に来ていたようで、なにやら白黒魔法使いに助けてもらったとか。

そして気づけば自分たちを助けてくれた紅白の少女も消えていた。

仕方ないのでその辺は無視して、ニコライは無線を手に取る

『総員、準備が整い次第、突撃せよ！尚、デルタ2（ニコライと来た部隊）は残ってもらう！そしてアパッチ部隊は空からの援護などを頼む・・・以上！』

そして、そそくさと準備をして、突撃するU・B・C・S

しかし、皆真剣な表情で、その表情だけで蛙おも殺せるんじゃないか？と思えるくらいだ。

もはや先ほどの戦闘で皆分かったのだろう、” 敵は尋常じゃなく強い”

それで隙を見せないように団体で突入していった。

尚、誰一人として表情の違うやつはいなかった

一人のミスが全体へと影響して、死者は免れない・・・いや、” 死者が出る戦闘だからこそ真剣” なのだろう

ちなみに、デルタ2を残したのは指揮官を養成するためだ、いくらなんでも指揮官が私だけってのは厳しい。

『・・・らアルファtwo、目標地点に到達、なにやら交戦模様、どうぞ』

『こち・・・ルタthree、血痕を発見した、サンプルを採取する』

『こちらデルタone、なにかの生き物の残骸を発見した、資料として写真を撮っておく』

（フム、いろいろあるようだ・・・だが、なにかの生き物の残骸？これは楽しみだ）

そしてデルタ2の兵士たちが返答を返す中、興味深い無線を聞いた

『・・・らアルファtwo！至急増援を頼む！くりかえs』アハハハハ！！』や、やめろ！こっちに来るなッ・・・来るなったら！！』皆、壊れないでね？』ヒ、ヒイイイ！・・・グアアアアアア！！！！』

アルファtwoの戦力は、今回増援として出した中でも室内戦（CQB）に優れている部隊だった。

やはりここは侮れないな・・・

Side out

Takurou Side

『・・・らアルファtwo！至急増援を頼む！くりかえs』アハハハハ！！』や、やめろ！こっちに来るなッ・・・来るなったら！！』皆、壊れないでね？』ヒ、ヒイイイ！・・・グアアアアアア！！！！』

拓郎たちや、他のチームもこの無線を聞いたときに、動けないでいた・・・いや、恐怖で硬直していた

無線の中に聞こえた少女と思わしき声、銃声、ひどく怯えていた拳句、殺された時の断末魔がこの短い時間で無線から響いて来たのだ。

U・B・C・Sの誰もが唾を飲み込んだ、”次は俺かもしれない”という恐怖と共に

なぜなら、兵士の室内戦闘（CQB）訓練で優れていたAlpha

Team2分隊がものの数秒で瞬殺だ、そう、”瞬殺”

兵士たちは、恐怖と戦いながらも探索を続けた。

T・N・E・M・S・I・S Side

走り続けて、地下へと続く階段を下りて、とある部屋の前に来た時のこと

やけにその部屋が騒がしい

それにその部屋のドアもすこし壊れている。

ネメシスは、すこしドアの方に寄りかかって、中の音を聞いてみることに

「アハハハハハ！禁忌『フォーオブアカインド』」

「ッ！増えたぞおおお！……！！撃て、撃てええええ！……！！」

「うおおおおお！……！！」

「メディック衛生兵！メディック衛生兵！デイルンが重症を負っている！」

「ウアア・・・クソウ・・・もう・・・駄目だ・・・」

（もの凄い交戦状態だな・・・しかし、一体どうなっているんだ？）

ものすごく中を見たいという衝動に駆られてしまったネメシス

（こういつときって、そーっとスキマを作って覗くんだよね？）

仕方なしに、わずか薄さ1・5ミリの隙間を作って覗いてみることに

「オニさん、覗きは犯罪ですよぉ？」

「ッ！」

思わず後ろに飛び退いてしまった。

だがその選択は間違えていなかったようだ

突然さっきまでのドアが消し飛んだ、そう、”消し飛んだ”のだ

「アハハハハ！鬼さんは壊レナイヨネ？」

そう言うと共に、さっきまで後ろにいた3人もやって来た。

一瞬だが、部屋の中を見ることができた、そこには悲惨な光景が広がっていた。

部屋には血の池が溜まっており、ある兵士は上半身と下半身が泣き分かれしていて、ある兵士は頭が無い、ほとんどの兵士は5体満足ではなく、しかもグチャグチャだ

「いつくよー!」『禁忌「レーヴァテイン」!』

少女がそう言っで、どこからか槍を出してこっちに突撃してきた

「目標判別、確認、Name「Flandoor skailer
ets」危険レベル、高」

「スタアアアアズ!」

対する”オニさん”は、金棒のようなスティンガーと、M134ミニガンを一気に掃射した。

到着した増援、それと狂い（後書き）

・・・うまく書けない

ちなみに紅白巫女は、咲夜戦
白黒魔法使いは、パッチェ戦

という設定
だよw

そして未だにU・B・C・Sと遭遇してないwww

最初に無線出したチームが先に死ぬ設定とかでよかったのかな？

前回言ったように

質問、アドバイス、新スペル、ネメシスの名前などをジャン！ジャン！募集中！

・・・ほんとに頼みます・・・ハイ

設定集、U・B・C・Sの装備類（前書き）

えつとね・・・まあアンブレラ私有軍の装備だよー

あとね、U・B・C・Sってホントは囚人の軍隊なんだけど

こっちの場合は違うよ・・・タブン

設定集、U・B・C・Sの装備類

衣類

戦術的な、危険な、そして戦闘活動への関与、

UBCSの工作員による軍並みの戦術的なギアを着用し、使用している。

皆共通で、黒い戦闘ブーツ、ベージュ色の作業用ズボン、緑色の作業用シャツ、そして背面に刻印されているUBCSの紋章を持つ耐荷重チョッキのいくつかのフォームを着ている。

彼らは、ベストに組み込まれているクロスドロホルスターを使用して、ドロップレグホルスター、などで、ピストルを運ぶ。

兵器

種類は、ピストル、自動小銃、精密ライフルと様々な爆発物を含む小型武器

ユニットの標準的なライフルはM4A1のアクセサリなし

公式のサイドスロー（サブマリウエポン）はSIGプロSP2009、あとは、STイーグル6・0s

高性能爆薬手榴弾が発行され、そして特にミハイルとタイレルパトリックによって使用された重火器については、各小隊は、いくつかの使い捨てのAT - 4対戦車ロケットランチャーが装備されていた。

UBCSのメンバーが装備して、ヘッケラー&コッホMP5サブマシンガンは、ラクーンで密かに作られたタナトスに効くようにされている。

ニコライGinovaeフがに接続されている特殊なランチャー使用のヘッケラー&コッホPSG - 1は、タイラントの血液サンプルを取ることが目的で、ライフル自体を実際に解雇されることはありませんでした。

生物兵器を探す使命を帯びているUBCSユニットのニクスはまた、MP5機関銃で武装していた。
別の手術、アーノルドは、同様にPSG - 1を使用して見られた。

ユニットにいたクラウドが使用する武器（クラウドが使用するM4カービンチームは、デルタ小隊が使用する標準的な武器と類似していた）は、M203のグレネードランチャーシングルと一緒に、バレルの下にマウントされているのベネリM3の散弾銃がついている。

彼らの任務を通して、ユニットが接続されているブローニングM2

・50重機関銃を持つフラットベッドハンビーに乗った。クラウド（チームのほとんどがバイオ3のハザード地域内、UBCSのメンバーと同じSIGのSP2009sを実施しながら、クラウドは、追加のSIG P225を行った。）

ユニットは、バイオハザードIEアポカリプスがその後、特殊部隊ゲームの傭兵の多くとして描かれ、彼らが装備している武器の種類がより多様になり、彼らのより多くの質素な対応を取り入れた。

彼らの主武器はIMI Tavor CTAR - 21と

IMIマイクロガリルアサルトライフルです。

彼らのサイドアームは様々な、デザートイーグルとベレッタ92F
Sを使っていた。

彼らは、M67の断片化手榴弾以外の任意の爆発的な武器を携帯して
いないようでした。

・・・以上!! x h a n k u より

設定集、U・B・C・Sの装備類（後書き）

いやー・・・無理してイギリスだったかアメリカのサイトを通訳して書くものじゃあなかったね・・・

なにか、わかんないことがあったら言ってください！><

（外話）風のような存在のセルゲイは・・・（前書き）

えーっとね・・・これはいままで出てなかったセルゲイの、行動のお話です

というかココで書いておけば、あゝ・・・なんでもないWWW^^^；

（外話）風のような存在のセルゲイは……

場所的に言えば、博麗神社と人里の間にある森の中

S e l g e y S i d e

「グスツ……私は……私は威厳が足りなかったのだろうか……」

「

とある森の中で、いい年こいて体育座りしながら花に話しかけている大佐

「確かに、もうカリスマなどはいらないと思って投げ捨て、今まで
のことを有効活用してキャラを変えようと思ったのだが、駄目だっ
たのだろうか？」

花に疑問を投げかけたけど、当たり前のことながら、返答が来ない

「父上ー！どこですかー？父上……え？」

そんなときに、新しく作った新イワンがやってきた

i w a n S i d e

はつきり言つて、関わりたくなかつた

ただそれだけなのに何かを勘違いしている父上がいる。

面白そうだから着いて行くことにした

S i d e o u t

S e l g a y S i d e

ナイフよーし！モーゼルよーし！アフトマートよーし！父親心よーし！カリスマよーし！

そんな掛け声が合いそうな感じで装備を整えたセルゲイは、近くにあったジープに乗り込んだ

「これで霧の出所にむかってやる！待ってるよ！我が息子よ！」

そしてエンジンを掛けたとき、少しジープが傾いた。

「父上、弟を助けに行くのに俺らをおいてっちゃ兄貴になれませんぜ」

さつき逃げていったイワンが助手席に座って言うてきた

「いや、あれはおm」

「父殿、せつしゃたちを連れて行くのでござる！」

今度は後ろに乗ったイワンに言われた

「・・・じゃあ行くか！」

あたかも何もなかったように、そして、家族でドライブに行くかの
ように告げて、ジープを走らせた。

（外話）風のような存在のセルゲイは……（後書き）

・・・説明？

セルゲイはネメシスに無視をされて落ち込んでいて、花と対談

そこにイワン登場、セルゲイが気づくと共に逃亡

セルゲイは全てを紅い霧のせいにする

八つ当たりする気満々な状態で支度をしたセルゲイは車に乗る

いざ！参る！・・・ってなタイミングでイワンたちが乗ってくる

イワン×2と一緒に紅魔館へ！

こんな感じ？ちなみに、キャラ崩壊とカテゴリに入れてあるため、ご了承ください

F l a n d r e S c a r l e t なんとなく鬼畜な妹（前書き）

戦闘描画がムズかし過ぎて、なかなか思いつかず、書けても訂正し
たりの繰り返し

F l a n d r e S c a r l e t なんとなく鬼畜な妹

「アハハー！オニさん凄いねー！」

そう言いつつもフランは4人での連携プレイを使ってくる

「・・・ッ」

連携プレイのせいで、なかなか武器を使えないでいるネメシス

そんな時、ふとした拍子にフランたちに隙ができた。

「ウオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

その隙を利用して、M134ガトリングを撃ちまくる

「ウゲッ！」

「ガッ！」

そのガトリングの弾幕に被弾した分身は、次々に消えていった・・・
のだが

「クツ・・・フフフフ・・・アハハハハハ！！！！！」

本体は、効いている様子が無い

そして、ネメシスにレーヴァテインを向けて、突撃してきた

「グッ！」

そのレーヴァテインは、ネメシスの拘束具ごと、防弾コートを貫通した。

「アハハハハあ！まだ生きてるんだねえ、オニさん面白い！」

（グッ！痛い、この槍はなんて代物なんだ！）

「アハハハハあ！まだ生きてるんだねえ、オニさん面白い！」

ネメシスは、この槍が神器のせいか、なにかしらのせいで再生がでないでいた。

「ウグッ！あ・・・アアアアアア！！！！！」

突然雄たけびを上げたネメシス。

すると、防弾コートがじょじょに裂かれて行つて、その後にたくさん
の触手が生えてきた。

これは、ネメシスの”第二形態”である

（意識が・・・）

ここから、ネメシスは正気を失った

S i d e o u t

F l a n d r e S i d e

「ウグツ！あ・・・アアアアアア！！！！！」

突然ネメシスが叫びだし、じょじょにロングコートが剥がれていった光景を目にしたフラン

そして、剥がれていったロングコートの下にあった触手を見て、少し寒気を覚えた。

（な、なんで？こんなのが怖いのか？）

その触手の気味の悪さなどに恐怖していることに気づかず、しかも
少しずつ元に戻っている事にも気づいていないフラン

「ウー・・・ウオオオオオオオオ！！！！！！！！」

ネメシスが雄たけびを上げて、恐怖で硬直しているとき、壊れたド
アの方から複数の足音が聞こえた

s i d e o u t

T a k u r o u s i d e

紅魔館を探索していたら、何やら安全地帯と思わしき雰囲気を放っている部屋が一個。

試しに入ってみた拓郎たち、そこにいたのは・・・

「あーっ」

「（おぜうさま／＼グッ・・・）」

「なにやってんの？あなたたちは・・・」

うなだれる少女、鼻を抑えているメイド、呆れている巫女、そしてもう一箇所では

「本を返さない！」

「死ぬまで借りるだけだぜ！」

なにやら口論している女性と魔法使い

こちらの存在に気づけないほど、のんびりしているらしい

と、『なら、俺らも行ってみようぜ？／＼』と、何やら興奮気味な隊員が部屋に一步踏み出した。

「ッ！」

部屋に一步踏み入れた瞬間に、メイドの姿が一瞬ブレて、隊員の背後に回り、首にナイフを突きつけていた。

「え？・・・ッ！動くな！」

一瞬呆気にとられていた隊長も、すぐに正気に戻ってM4カービンを突きつける。

しかし、そのカービンも、突然出てきた光で吹き飛ばされる。

「そつちこそ動くなだぜ！」

隊長も呆気なく拘束されてしまった。

「後ろの4人もうg『ウオオオオオオオオオオオ！！！！！！』なん
だ？！」

突然の雄たけび・・・しかもコレはネメシスの雄たけびだった。

（これは、報告か）

拓郎は無線機に手を伸ばし、通信を試みようとしたが

突然現れた光で、無線機を破壊される。

「なッ！なんてことをしてくれたんだ！」

突然のことで、思わず叫んでしまった拓郎

「動くなつて言っただぜ？」

魔法使いがドヤ顔で言うてくる。

「（仕方ない、か）隊長！我々は先に息子殿の増援に行つてきます
！」

「え？おい！ちょっと待てよ！置いてくのかよおお！！！！！」

隊長の悲痛な声を見捨て、残った4人の部隊で雄たけびのあった
方に向かう。

「そう勝手にうろつかせるとでも？」

廊下の先に現れたメイド・・・さっき部屋で隊員一人を拘束していたはずだ、なぜここにも？

「私は『時間を操る程度の能力』を持っているので、容易いことです。」

（これは厄介なのに遭遇した）

そう思うがなんとやら、またも雄たけびが響いた。

「この雄たけびの出所は・・・まさか！妹様のところ？！」

その話を聞いて、妹様とはどんな人かを聞いた。

そして、人ではなく、精神状態が異常だと言うことを聞いた。

「これじゃあ息子殿がヤバイ！無線が故障した今、もしも”第二形態”に入ったときの対処が分からない」

こんなたくさんの疑問を抱いていたら、隊員の一人に打ち砕かれた。

「ネメシスは再生力も高く、耐久力も高いから、倒しちゃえばいい

のでは？」

とりあえず、雄たけびの出た地点に向かう

その部屋のドアは無くなっており、無残に荒らされたような感じだった。血の海と肉塊の残骸があつたから

そして、その部屋にいたのは、“第二形態”のネメシスと、怯えている少女だった。

F l a n d r e S c a r l e t なんとなく鬼畜な妹（後書き）

うーん・・・なんでこんな難しいんだ？w

まあ、次はネメシス戦になっちゃったwww

フランは、勝手に正気にさせてしまいました。

- ・ 恐怖で能力を制御できるようになるとか・・・トラウマ発生かぁ・・・

ちょっとしたお知らせ？的なの

えーっと・・・

一応逃げるような事言いますが、まずはじめに、すみません

このような駄文をお気に入り登録している方には、なんてお礼を言
っていいか・・・

それに評価をしてくれた皆さんにも・・・

・・・とりあえず、本題に入ります。

実は、俺の書いている文を、他の皆さんの小説読んでから

試しに読んでみたら・・・

欠点が多すぎました。

とりあえずはある程度修正して、って行きたいんですけど

なんかU・B・C・S隊員が第二の主役化しちゃってるんですよ
lorz

そ・こ・で、新しくもう一つ作って、そこに隊員の話を書こうと思
うのですが・・・どうでしょう？

・・・ハイ、いきなり初心者であり駄文作者がこんなことを書くの

は生意気であつたのは理解しています。

しかし、一種の娯楽として書いているので、できるだけ良いものを書きたいんです。

できれば、ご協力下さい。

・・・アンケート方式で問います。

ちょっとしたお知らせ？ 的なの（後書き）

- 1 ・このまま続けていく
- 2 ・UBCS 隊員は別にする
- 3 ・目障りだから消えてもらう

U 戦闘（前書き）

久々に更新・・・なぜか思いつくのは紅魔の後
そしてなぜか2つにルートが別れる・・・

どうしよ・・・次の異変まで幻想郷かラクーンかそれともどこかの
生物災害区か・・・

ま、いいや・・・ここで兵士に名前付けよう・・・どうせ死んじゃ
うんだしさ！？

ちなみに拓郎は兵士サイドでの主役だから死なない・・・アメコミ
みたいに

隊長：デネブ（捕虜化）

1：拓郎

2：ガルヴ

3：ノルヴァ

4：健斗（捕虜化）

5：ホーク

・・・この話で使わせてもらう兵士の名前だよ・・・多分どれか
死ぬ

U 戦闘

「総員散開ッ！ヤツを惑わせろッ！」

ノルヴァの声が部屋に響く

その言葉に、ガルヴとホークがネメシスの後ろに回り込んだ、ノルヴァは威嚇射撃をしていた。

ネメシスは囲まれたことに最初は戸惑ったが

場所は狭い地下室で、相手は銃身の長い室内では不利な突撃銃

ネメシスは触手を伸ばし、振り回した。

「ウガッ！」

「ウボア！」

「アガッ！」

その触手が時には銃身にぶつかって弾を逸らせ、味方にあたったり時には人に当たって吹き飛ばしたりした。

そして、拓郎以外は皆戦闘不能になった。

それでも尚触手は振り回された。

「ッ！」

そのうちの一つが拓郎へと先端を向けて、いまにも貫こうとしていた。

t a k u r o s i d e

「ッ！」

明らかに積んだ。

もうこれ以上は無理だ・・・そう思った拓郎は、

（せめて最後は・・・いや、死ぬまでやってやるッ！）

少し下げていた銃口を上げて、ネメシスの頭へと向けて、乱射した。

「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

火事場の底力で反動を最小限に抑え、ネメシスの頭を狙った。

カービンの弾はネメシスの頭へと吸い込まれるように当たっていき。怯ませた。

その怯んだ瞬間に、拓郎の頬が緩んだ

そして、3・4発撃ったあとにネメシスは倒れた。

「・・・は、ハハハ・・・アハハハハハ!!!!どうだッ!!!!思い知ったか化け物がッ!!」

そして、ネメシスへと近づいていき、カービンの銃口をネメシスの頭へと近づけ、撃った。

しかし、弾は1発しか出なかった。

30発しか装填されていないのに、あれだけ撃ちまくったから当然のことである。

ネメシスは、弾切れなのが分かったのか、ゆっくりと立ち上がった。

「なッ！」

拓郎は後退しながら、マガジンポーチからマガジンを取り出し、リロードを試みた。

「クソッ！入れ！入れってんだよッ！」

しかし。恐怖と焦りのあまり、なかなか填めることができない。

ついに、壁際まで追い詰められた。

壁に背中がくっついたことで、尚恐怖が倍増したが、背中は大丈夫だということが分かって少し落ち着きを取り戻し、マガジンを填めてリロードをした。

しかし、その時にはネメシスがすぐ近くに迫っていた。

拓郎は腰だめで銃口をネメシスへと向け、希望と共に5・56mの鉄の弾を撃ち放った。

希望を込めて撃った。

だが、現実はその希望を見なかったかのように捨て去ってくれた。

ずっと鳴っていた銃声は消え、銃口からは熱で煙が立ち上り、空の葉莢が地面に落ちる音が地下室に響いた。

『ウオオオオオオオオオッ！！』

ネメシスは、けたたましい雄叫びを上げ、歩いてきた。

その姿はまるで悪魔の如く恐ろしかった。

拓郎は、最後の最後まで諦めないように、腰の手榴弾へと手を伸ばした。

ネメシスは拓郎の目の前で止まると、右手を振り上げた。

その振り上げた瞬間、拓郎は腰の手榴弾をポケットから抜き取り、ピンも一緒に抜いた。

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

『ウオオオオオオオオオオオ！！！！！！』

紅魔館の地下室から、人間の雄叫びと追跡者の雄叫びがひびき響き
わたり、そのあとに爆音が館内に響き渡った。

U 戦闘（後書き）

やべ、少なかった。

・・・ネメシスが本領を発揮していない気がする・・・

ま、いいや、とりあえずいつかアンケートをやってみよ。

s a k u y a L a s t S p a r t (前書き)

・ ・ ・ いい加減紅魔郷終わらせるか ・ ・ ・ 東方キャラほとんど活躍してなかったし ・ ・ ・ 短いけど強制終了する。

s a k u y a L a s t S p a r t

「危なかったですね」

煙のたちこもる部屋から聞こえる声

煙が晴れたときに見えた光景は、相変わらずの惨劇の跡と一人のメイド

「・・・」

メイドは銀髪蒼眼で整った顔立ちだ

そして驚いたことに、拓郎を抱えていた。

屈強な兵士である拓郎を、まだ20近くの女性が抱えているのだ

そしてその女性は拓郎を担いで部屋を出ようとした

（シュッ）

（ザシュッ）

ネメシスの触手が飛んできたのに、突然どこかから出てきたナイフ

により防がれる。

「ザ・ワールド」

女性がそう言った瞬間、女性と拓郎の姿がブレて・・・消えた

文字通り”消えた”のだ。

部屋に残されたネメシスは限界が来たのか突然倒れた。

後から来た他の分隊により、ネメシスは回収された。

まだ助かる見込みのある隊員は回収されたが、もう手の施しようがない死体などは森の中に捨てられた。

隊員達が撤収する時にセルゲイたちが来て、この事件の首謀者と話をした。

どことなく事件と外れて、新たな事件を作り壮大な被害を作ったネメシス

幻想郷の異変は生物災害以上の災害であることを知ったU・B・C・
S 達

と、撤収の際にシリアスっぽい雰囲気を出していたが、セルゲイと事件の首謀者による発言で崩れてしまった。

「「宴（宴会）をするぞ！（わよ）」」

sakuya Last Part (後書き)

えーっと・・・最近思いつかなくなった今日この頃

そして小説を消すことは物凄く大変な行為であることも知った今日この頃

がんばって上級者並みに書けるように頑張ろうと思った今日この頃

・・・結局殺そうと思ったキャラは死ななかったしな・・・

・・・そだ！次はハンク・・・は・・・やめて、アイアンズ署長とベンとその他東方キャラを出してみるか！

宴会・宴をやるう（前書き）

・・・BIOを主体にしてよかったのだろうか・・・いや、やめよう！東方要素を入れなくては！

・・・ああ、そだ、ネメシスは出てきません・・・

宴会・宴をやるう

「ガハハハハッ！」

事件のあった日の夜、事件の起きた「紅魔館」で宴会は行われた。

紅魔館は改めて見ると、夜でもわかるほどに真っ赤な建物だった

建物は、かの「アークレイ山地」の洋館以上に大きく、そして豪華だった。

そして、その館の前庭で宴はやっていた。

宴はこの事件で酷い惨劇が起きたと思えないほどの賑わいを見せていた

ある兵士たちは笑いながらワインや酒を飲み、コスプレと思わせるような少女達と会話をしたり

その少女たちと飲み比べや腕相撲などをしたり・・・とにかく凄い賑わいを見せていた。

そんな中、セルゲイとニコライと、事件の首謀者である”レミリア・スカーレット”と

拓郎を救い、ネメシスと戦闘して唯一無事に帰ってきた、レミリアの従者”十六夜 咲夜”

その4人の代表者…つばい者たちは、庭を見渡せるベランダで話合
いをしていた。

G i n o v a e f S i d e

（なんで…なんで”幼女が主”なんだ？）

現在ニコライは、セルゲイの隣の椅子に座り、赤眼蒼髪の背中に悪

魔の羽のようなものを生やした少女と

その少女の後ろに立っているメイド長の女性をチラチラと見ながら
そう思っていた。

『失礼ですが…この館のご主人はどちらに？』

そうセルゲイが事件の後に言ったのはいい思い出

その”ご主人”が涙目となり、メイド長が拓郎を担ぎながらセルゲイの後ろに現れ、首筋にナイフを突きつけていた。

（あの時は、キモが冷えたなあ）

撤収準備中の部隊がメイド長へと銃を向け、ニコライは主のレミリアの後ろへと素早く回り込み、こめかみに銃を突きつけていた。

その時のセルゲイの表情は、ニコライを横目で睨んでいた…俗に言う『ジト目』である。

そのようにいろいろあった一日の思い出にふけていたら、レミリアが口を開いた

「いきなり聞くのもなんだけれど、フランを懲らしめたあの鬼は一体何？」

「フラン？誰だ？我はそんな名前の奴は知らないぞ？」

「大佐：拓郎一等兵が運ばれる前に運ばれてきた娘のことではないでしょうか？」

ニコライ達が無線で状況を視察しているときに、一個の小隊の無線が通信不可能になった。

その小隊の状況を判断すべく、最後に途絶えた位置へとほかの隊を向かわせて返答を待っていた時、メイド長が一人の少女を抱えながらやってきて、『保護して欲しい』と言ってきた。

最初は訳が分からず、聞いてみたら『ある男が私たちは敵ではない、そして私たちの指令本部が近くにあると言ってきたから保護してもらおうと思って来た』と言って、少女を渡してきた。

少女は金髪で、背中には七つの宝石が付いている羽があった。

名前は聞いていなかったが、多分その少女だろう…とニコライは思った。

ちなみに、現在フランは庭で楽しそうにはしゃいでいる

「そうです。妹様は能力の制御ができず、危険なために地下室で幽閉していました。しかし、あの妹様が怯えるほどの鬼は一体何者なのでしょうか？」

「さつきから鬼言っているが：あれは私の息子だ。」

「え？」

「え?!」

メイド長の問いに、セルゲイは事実で返した。

「あれは私らで作り上げた元生物兵器の”T・N・E・M・S・I・S”の改良型です。自我・声帯器官を取り入れるのはかなり難しかったのですが：まあ一応大佐の息子様でございます。」

「一応ではない、あれは私の息子で間違いないのだから」

「そうでしたね」

「ガハハハッ!！」

ニコライとセルゲイの会話についていけず、呆然とした表情で固まっていた二人は再び動き出し、メイドは問いかけてきた

「その息子様は、私が駆けつけた時には無数n・・・つぶっ」

その時のグロテスクな光景を思い出したのか、いままでの威厳が取

れ、吐き気がメイドを襲った

「咲夜：今日はもう休みなさい、あとはなんとかするわ」

「ですがお嬢様わ、いいから休みなさい！」…ハイ」

メイド長は渋々といった感じにベランダを後にした。

「で？本題の本題に入るけど、あなたたちは何者？運命が常に途絶えているのだけれど」

メイド長の姿が見えなくなるのを確認したあと、レミリアが質問をしてきた。

「何？！運命が見えるのか！？」

「ええ、私は『運命を操る程度の能力』を持っているのだけれども…あなたたちの運命はとうの昔に途絶えているのよ」

「…悪いが、その質問の答えを教えるわけにはいかんな」

「え？」

「我々は数々の悪業を前世で行なってきた。それが正しいと信じてな…だが、状況が変われば考え方も変わる。それに、その時の悪業

と惨劇・悪夢を知りたいのか？死がどんなものかを知りたいか？悪
いが…君のようなお子様にはまだ早い」

「…」

レミリアはその返事を聞いた後、真剣な顔をして、考え始めた。し
ばらくした頃

「そう、ね…わかったわ、この疑問は心の奥にしまっておくわ」

「流石主だな、いい選択だ。さて、私たちはそろそろ帰らせてもら
おう…ニコライ」

「わかりました」

ニコライはベランダから去っていった。

「今日はいろいろと感謝する。またいつか会おう、我が同志よ」

「そうね」

セルゲイはそう言い残し、ベランダを後にした。

残されたレミリアは、どこか嬉しそうな、そして寂しげな顔をし

「同志…ね、フランを元に戻してくれたのはありがたいけど、同じ主としてカリスマの差が違ったなあー」

さっきまで賑やかだった庭を見渡し、さっきまではしゃいでいたフランと楽しそうに会話していた者たちを思い浮かべながらそうつぶやいたレミリアだった。

後日談だが、フランは地下室から出て、今まで避けられていたのが嘘のように紅魔館のみんなと楽しく過ごし始めた。

その姉のレミリアはというと、メイド長に説教をされていた。『寝るときはベッドで寝ろ』だのなんだの…ちなみに、いままで忘れ去られていた門番は、何事も無かったかのように門に寄りかかりながら眠っていた…後々メイド長に見つかって、頭にナイフを投機されたのは言うまでも無い…かもだけれど

宴会・宴をやるう（後書き）

今思い出したけど、ネメシス主役じゃんツ！

何気に拓郎というオリキャラが主役っぽくなっちゃってる・・・

読み返してみればみるほど...orz

設定集：『傘無しの郷』について

・傘無しの郷

もう一つの人里のように見える場所

だけど実際は違う

地上には

5階建てのようなマンションタイプの寮

大学病院のような医療施設

そして、中央にでっかい本部のような物がある。

2階建て事務所のような談話施設

あとは滑走路があったり道路があったり工場があったり

兵器倉庫があったり訓練場があったり

土地の広さは霧の湖2個分

・施設の数

本部〃1個

医療施設〃 1個

寮〃 4個

工場〃 2個

倉庫〃 4個

訓練施設〃 3個

談話施設〃 1個

・その他

どっかの避難施設というか刑務所みたいな門やへいが構えられている。

傘無しの郷は地下も全部つながっている…一つの都市になっちゃってる。

遭遇した妖怪は…排除

時々やってくるM s ・パープルと名乗る女性は、セルゲイ・ニコライに並ぶ偉い人になっている。

娯楽施設などが無いため、隊員のほとんどは訓練以外の時間は人里で過ごしていたりする。

地下にも娯楽はあったりするが、近未来的な娯楽より、古典的な娯

樂にハマった者が多く、やはり人里の方が多い

設定集：『傘無しの郷』について（後書き）

・・・伝わるかが心配だ・・・

これで理解してくれると嬉しかったりする。

兄さんとチルノと時々…（前書き）

明日はサバゲーだ！オラ！ワクワクすつぞ！

・・・ってなことはどーでもよくて、ちよつとwktkしすぎて落ち着けないからネメシスを起動させます。

兄さんとチルノと時々…

「ん・・・ここは」

『やあ！久しぶりだね！』

「あつ兄さん！！」

目が覚めれば真っ白な世界と、目の前に…兄さん

『どうだい？転生した先は』

「よくわかんないけど…なんでネメシス？それと、なんでセルゲイとかニコライが改心してんの？」

『ああ…それはね、お前が心配だからね…でも、突然形態変換した時は我を忘れていたね』

「え？うん、あれってどうやれば平常心を保てるようになるんだ？」

『それはな、適当に過ごしていればその内保てるようになるさ』

「へえー…よくわかんないや。」

「あと、向こうとこっちでは記憶の中に違いが現れるのはどうして？」

『違い？違いって？』

「なぜかバイオ知識と東方知識が抜けてるんだよ…あることをしたりすると一時的に戻ってくるけど」

『…』

「あと、ここがどこで兄さんがなんでこんなところにいるかも知り
て「おい！」え？」

『え？あ！わりいな！時間だ。じゃあな！』

ずっと会話していると、突然声が聞こえてきて、真つ白な世界が一
転して、河原と真つ赤な川だけの世界になった。そして、その川に
浮かぶ一つの船と一人の女性…でかい鎌をしゃっているから死神？

「おい！」

『わかってるってこまっちゃん』

「あれ？あつちは？」

『弟、まだ死んでないから運ばなくていいよ』

「そっか、じゃあその弟さんやら」

「え？あ、ハイ」

「こっちにきたら仲良くやろうね」

「はぁ・・・」

（死神に誘われるって…ハンクだったらよかったのになぁ）

ハンクとは、今は無き地獄の街”ラクーンシティ”に、とある”物”を回収する部隊の一人である。

ハンクの通り名は”死神”、彼と一緒にになった部隊は彼を残して全滅

その時の部隊もハンクを残して全滅…ちなみに、ハンクは豆腐好き

「おっと…そろそろかな？じゃあこっちに來たら私の名前を呼んでねー」

「わか…り…まし…」

Black Out

Cirno Side

「アタイったらここまでこれるなんてサイキョーね！」

「チルノちゃん、やめようよー、なんだか怖いよ？あの人達」

「うわー広いのだー」

「いろんなものがあるねー」

”チルノとその友達たち（バカルテット）”が、傘無しの郷の門の前に立っていた。

列になっていて、先頭からチルノ・大妖精・ルーミア・リグルの順に並んでいる。

「ねえねえおじさん！」

「ん？」

チルノは門の警備係の人に話しかけた。

「なんだい？迷子かな？」

「ううん、違うの」

チルノはそう言って、その警備係の人の顔に手を向け…

「へ？！」

「凍符『パーフェクトフリーズ』!」

「ええええええええええ???!!!!」

「ちょ、チルノちゃん!何やってんの?!」

「ここの人に見つかったらやばいよ!早く逃げなきゃ」

チルノの突然の行為に焦る大妖精とリゲル

「こいつ食べてもいいのかー?」

「うんいいよ、アタイが倒したんだからね！」

「ちょ！ダメに決まってるじゃないか！」

食欲を満たそうとするルーミアと、すんなりそれを許可するチルノ、そしてそれを全力で否定するリグル

凍らされた警備係はというと、所々氷が付いているが、遠くから見ればただ固まっている状態

…つまり凍っている。

「さあ！次にいくよー！」

「ちょ、チルノちゃん！」

「え？待ってー！」

「そーなのかー」

S i d e o u t

T・N・E・M・S・I・S S i d e

「ん・・・」

ふと目が覚める。自分はベッドに寝かされているようだ。

（どういうことだ？生物兵器ならどっかのポッドみたいなケースの中に入れてあるはずだが…）

目覚めて早速頭に疑問符が浮かんできたが、そんなことを考える暇も無しに、殺風景な部屋のドアが開いた。

「シシヨーーーー!!」

「わわっ！勝手に入っちゃだめでしょ?!」

「そーなのかー?」

「そーなの!」

「…これは一体」

ゾンビの如く、チルノとその友達がなだれ込んできた。

「シシヨー!…って、あれ?シシヨーがいないぞ?」

「ねえねえ、そのシシヨーってどんな人?」

「シシヨーはね!フツのオニより怖い顔なんだけどね!とっても優しくってサイキョーなんだ!」

「じゃあ違っね、ここのお兄さんにちゃんと謝らなきゃ」

（いや、俺がそのシシヨーで合ってるんだ…え?今なんて言った?）

チルノ達のやり取りを聞いて疑問が浮かんだネメシス

チルノ達が病室に着いたあと、交代にやってきた隊員が凍っている同僚を見て、警報を鳴らさずに腹を抱えて笑い転げてしまった。その隊員曰く「顔がw w w 顔がw w w」だそうだ。

もちろん、後々解凍してもらったが、あとでその同僚がその隊員に文句を言ったそうだ。

兄さんとチルノと時々…（後書き）

あらら、ggggdになってしまった。

まあ、いつもの事だけどね…

えーっと、見てくれたら嬉しいんですけど、この質問も答えてくれたら嬉しいなあなんて

1次の事件は次の異変に行く

2次の事件はラクーンシティーに飛ばす（一部東方キャラを連れて）

このどっちにしようか迷ってるんだよねー・・・だから答えてくれたら嬉しいな。

あと、またいろいろと変換しましたーw

…じゃなかった。ネメシスの名前だれか考えてくれませんかー…；

なんだか書きづらいし思いつかないんですよー…；

変わる肉体と依頼（前書き）

ハア…雨が降ってサバゲーが…鬱だ…
Blurryの「Puddle of Mudd」聴きながら更
新するか…

変わる肉体と依頼

「あーっと…その君、今なんて言った？」

「え？だからお兄さんって…」

どうやら、ネメシスの聞き間違えでは無かったようだ

「ん？その声は…シシヨー！」

突然チルノが叫び、ネメシスに抱きついた。

T・N・E・M・S・I・S Side

「冷たッ！」

チルノの肌が、ネメシスの肌に当たった瞬間の感想はそれである。

と、ネメシスはまたも疑問に思う点が見つかった

（あれ？なんで温度が感じ取れるんだ？）

ネメシスは温度に鈍い…というか生物兵器は基本、兵器として活動するために余計なものは除かれてる。

と、また疑問に思っている時に、廊下を走る音が聞こえてきた。

その音がドアの元まで近づいて…

「我が息子よおおおおお！！！！！！」

「大佐ああああ！！！！廊下を走ってはいけませええええん！！！！！！！！」

…セルゲイとニコライがやってきた。

二人ともかなりの距離を走ったのか、ゼエゼエと吐息が漏れている。

「おお…これは、やはり優秀な人材が多かったのだな…」

「だから言っただじゃないか！渡した報告書はどうしたんだッ！…あ、すみません…つい…」

「報告書？ちよつと見せてくれませんか？」

ニコライがセルゲイに怒声を浴びせるという珍しいイベントはスルーされ、ネメシスはその報告書を見てみようと思った。

ちなみに、浴びせられたセルゲイはポカンとしていた。

「ん？ああ…わかった、これから持ってくる」

ニコライはそう言って、部屋から去っていった。

「アタイもビックリなおじさん達だ…」

「すごかったねー」

「怖かったのだー」

「そうだねー」

部屋の隅から聞こえてきた声…バカルテット達だ。

上から順番にチルノ　大妖精　ルーミア　リグルの順で喋っていた。

「おや？…フム…お嬢さん達、お見舞いかな？」

セルゲイは表情を戻し、部屋の隅にいる4人に話しかけた。

「ちがうもん！アタイは弟子入りしに来たんだもん！」

「え？違うでしょ！お見舞いでしょ！」

「え？ああ、そうだったそうだった。シシヨーにこれあげる！」

チルノはスカートのポケットから小さな綺麗な玉を渡してくれた。

「ありがとう」

ネメシスは受け取ったあとにそう答えた。

その後、ニコライがやって来て報告書を見せてもらった。

「私たちはもう兵器としての開発などに力を入れる必要は無いと思いましたので、少々人間に近づけてみました。」

報告書には、顔写真と全体の写真が貼っており、身長、体重なども書かれていた。

顔は、前のように肉と肉を無理やり縫い合わせたような顔ではなく、歯茎も剥き出しではない…

ただ、目は白いままだ。

肌の色はちょっと赤い茶色のような感じである。

体重は260kgで、身長は289cmという巨人である。

（惜しい…あと11cmあれば量産型に追いつけたのに…というか、もう人間とあまり変わらないなあ）

ちょっと背の低いく、色が赤っぽいイワンとでも言えばいいだろう

あと、報告書の最後に、重大な事が書かれていた

《触手は、養成所にいた巨大ヒルを題材にし、型を留められるようになってる。これで見えた目はばっちし人間だね！やったね！》

最後の は分かんないが、とにかく触手も型を変えられるようだ。

試しに、自分の手が見える位置に手をかざし、手の形を変えてみた。

「おおお?! シシヨーの手が変わったぞ!？」

「すごいねえー」

「おいしそーなのだー」

「ルーミアちゃんは相変わらずだね」

バカルテットの個性的な感想を聞いていたら、ドアの壁がノックされた。

「失礼してもよろしくて?」

そこには、胡散臭い笑を浮かべた女性が立っていた。

「あ、おb」

「バンッ」

「あら、ごめんなさい? 手元が滑っちゃったわ」

「ヒイ・・・」

チルノが何か言いかけた瞬間、その女性の扇子が折りたたまれ、チルノの足元に刺さった。

「おお、これはこれは、M s・パープル嬢ではないか。」

「どうもー」

そのM s・パープル嬢は扇子を抜き取り、口元を隠してまた笑みを浮かべた。

M s・パープル嬢は、ドアノブのような帽子を被り、白衣を着て、伊達めがねを着けて、白衣の下にドレスを着込んでいる。

そのような格好なのに、綺麗な金髪と金色の瞳だから、よりミスデリアスになっている

「で？一体どのような要件で？」

セルゲイはパープル嬢に尋ねる

「えーっと、ちょっとお願い事があってね」

「ほう、それは一体？」

「部隊を編成してくれないかしら」

変わる肉体と依頼（後書き）

あー… やっちまったぜ…

もう質問なんて「オワタｗｗｗ」だ！

ちよつとラクーンに飛ばす。

ちなみに、このパール嬢が誰だかわかるよね？

… 相変わらずキャラ崩壊が激しいな…

名前もいまだに決まってないし（ネメシスの）

日常系がほとんど入らない気がする… 戦闘描画苦手なのになんでこ
うも戦闘に行っちゃうんだろ…

U 隔離された傘の傭兵（前書き）

拓郎や兵士を主体として進めていく話の場合は、タイトルの最初にUを付けることにしました。

あと、エスコンの曲聴きながら書くと捗るわぁ〜・・・も一個書こうかな・・・

U 隔離された傘の傭兵

セルゲイ達が今所属している軍はUmbrella・Biohazard・Countermeasures・Serviceという名前だったが

Umbrella・Isolation・Countermeasures・Service《隔離した傘の傭兵》という名前になった。

U・I・C・Sは6人一組のチームが一つの集団として出来ている。ちなみに、チームは必然的に6人になる。

そして、そのU・I・C・Sの基地は、傘無しの郷である。

出入りは基本、変な奴や害をなす奴でなければ自由だったりする。

そんな傘無しの郷に住み、U・I・C・Sとして活動している人たちに視点を向けてみようと思う

Denevo Side

「
てあるからにして、妖怪や化け物モンスターは、耐久力が高く、遭遇
した場合はできる限り一人で対処しないようにして
」

紅い霧の事件の後、妖怪や妖精や化け物モンスターに関する会議が開かれるよ
うになった。

参加者は、隊長格の人だけだ。

U・I・C・Sのチームは、全部で6チームある。つまり6人と、
あとはその他の研究員やらエンジニアやらが集まって会議を進めて
いた。

…重要な席が一つ空いているにもかかわらずだが…

その会議の途中、緊急アナウンスが基地中に響きわたった

『U・I・C・S諸君、至急本部の方へ集合願いたい』

（は？一体何があったんだ？）

拓郎の所属しているファーストフォースの隊長のデネブはそう思っ
た。

彼らファーストフォースはネメシス第二形態との戦闘の後、誰一人

として欠ける事無く救出されたのだ。

隊長と一名は捕虜となっていたから無傷であったが…

その彼は汚名返上すべく、会議で役に立つところを見せようとしていたが、急なアナウンスで会議が中止になった。

彼は若干イライラしつつも本部へと向かった。

S
i
d
e

o
u
t

U・I・C・S本部の中央にある演説場、そこにU・I・C・Sの戦闘員達は集合した。

そして、その演説場にある演説台に、セルゲイは立ち、演説を始めた。

「えー…皆を集めたのは緊急の知らせが入ったからだ！それは…」

セルゲイが言葉を溜める。

その瞬間、演説場はなんとも言えない空気に包まれ、失敗は許されない雰囲気となった。

「私の息子が復活したッ！！！」

「ザワザワ」

「なあ、後で人里の団子屋行かねえか？あそこの団子うめえよな？」

「おい、そのの！訓練場行ってどっちが命中率高いか競おうぜ！負けた方はコーヒー奢りな！」

「ちょッ！冗談だ！話を聞いてくれ！」

「シーン」

「えー：我々U・I・C・Sは、幻想郷に侵入したラクーンシティ
Iを破壊すべく、準備をしてもらいたい！

そのラクーンについては、これからM・S・パープル嬢に話しても
らう。以上だ」

「パチパチパチ・・・」

「ザワザワ」

「おい！ラクーンだってよ、消滅したんじゃないのかよ」

「知らねえよ、なんでまた悪夢を見なきゃいけないんだよ」

最初はふざけていた兵士達だが、セルゲイの命令を聞いて焦り始め
た。

M・S・パープル嬢は、そのような事は想定内だったようで、落着
いた表情で演説台に立った。

だが、M・S・パープル嬢はセルゲイやニコライ達の前にしか出てき
ておらず、U・I・C・Sの前に出てきたことが無いわけだ…

「おい、意外と美人じゃねえか」

「ああ、だが、あの胡散臭い笑みがちよつと玉に傷だな…」

また兵士たちが騒がしくなり始めた。

「お初にお目にかかります。M s . パープルと申します、以後お見知りおきを」

パープル嬢が喋り出すと、魔法のように静まり返る演説場

「侵入したラクーンの事です、まずはこの幻想郷について、簡潔に説明してから本題に入りましょう」

「幻想郷は、あらゆるものの全てを受け入れる、全ての理想郷。でも、それが残酷な事を起こす。それは異変、貴方達で言う事件ね。そんな場所だから、今後とも起きないとは限らないわ。」

「で、そのラクーンだけでも、なにか大きな力と何かの力がぶつかった拍子に入って来ちゃったみたいねえ。以上よ」

ラクーンの説明の方が簡素だったM s . パープルの演説は、これにて終わった。

そして、今度はニコライが演説台の上に立ち、最後の言葉を言った

「戦闘員たちに告ぐ、この任務の開始は2日後だ！それまでは準備期間にする！その間に準備しておくなり休むなり好きに過ごせ！以上だ」

T a k r o S i d e

演説が終わり、みんなが演説場から去った後、拓郎は寮に戻った。

「ハア…行ったことのある奴は皆地獄だった、って言うけど…どんなところだったんだ？」

拓郎は、いろいろと地獄を連想してみるが、ありえないことばかりで、全然どんなところだったかが分からなかった。

それに、拓郎がこの幻想郷に来る前には既に地図にあったラクーンの名前や歴史は消えており、そのような名前の都市の存在すらわからなかった。

拓郎は気分転換に、と思い、寮の屋上に行くことにした。

外は既に暗くなっており、空には夥^{おびただ}しい数の星が輝いていた。

「お？」

空を見上げていたら、後から声が聞こえてきた。

声が出た方を見ると、同じ隊のホークが居た。

「どうしたんだ？」

「いや、気分転換がてらに…な…ったく、ネメシスの暴走の次はあの地獄に逝けだなんて…ついてねえな」

「なあ、その地獄って、どんなところだったんだ？」

「あ？ひでえところだったな…数百万、数十万という人がヤツらに殺され、悲鳴をあげ、助けを求め、祈り、奇跡や神を信じ、狂い、殺し合い、奪い合い、見捨てられたり…ヤツらは死を知らない、肉や血があれば喉や腹の欲求を満たすためにやって来る…だが、ヤツらってのはゾンビだけじゃねえ、殺戮を生きがいとする生物兵器も多々いたさ。もちろん、ネメシスもな…生き残って帰ってきたのは数えられるほどだけだったさ…最初は数万と居たのにな。しかも、その地獄を作った原因はネズミがウィルスを運んだって言うしな」

（そんなことで…そのような地獄が）

拓郎は、わかっていたつもりだが、真正正銘の現実の地獄を知り、そしてその原因が小動物の行動で起きているという事実を知り、心底驚いた。

「お前、ここに来た時、何か本を渡されなかったか？」

「え？ああ、そういえばそのようなものを渡された気がする」

「その本をよく読んでおけ、いままでアンブレラという企業がどのような事件を起こし、どのような惨劇を作り上げたのか、その全てが書いてあるはずだから」

「わかった」

ホークは全部読んだのであろう、本を進めている時のホークの顔が一瞬悲しそうになっていた。

「…なんだか、気分転換のつもりで来たのに、暗くなっちまったなあ」

「ああ、すまない……」

「なあ、明日チームの奴みんな呼んで装備とかいろいろ揃えようぜ」

ちょっとした憂さ晴らしだろう。その提案を拓郎は承諾した。

その夜は次の日の朝早くに寮の入口に集合するようになり待ち合わせをして別れた。

部屋に戻っている途中に通り過ぎるドアから聞こえる泣き声を聞き、無事に帰れるか心配になる拓郎だった。

U 隔離された傘の傭兵（後書き）

ハイ、シリアスっぽくなっちゃいました。

コメディーがあ……

ハア……そっいや中間テストが近々あるなあ……

風邪こじらせてサボるか！w

あ、誤字脱字、指摘などなど

あと、ネメシスの名前があつたら教えてください

現時点での設定集（前書き）

現時点までの設定だよー
…

ネメシスのステータスは無いよー

現時点での設定集

U・I・C・Sのチーム一覧

ファーストフォース

隊長：デネブ

1：拓郎

2：ガルヴ

3：ノルヴァ

4：健斗

5：ホーク

デルタフォース

隊長：クラリス

1：ネツガ

2：ギョムニル

3：ザック

4：ホー

5：ライアン

アルファチーム

隊長：祥太

1：ガンガ

2：ディラン

3：ヴェンリル

4：ミレオ
5：ボブ

チャーリー

隊長：イヴ
1：エヴァ
2：リィ
3：レア
4：クリスティン
5：美恵

グレゴリ

隊長：ケビン
1：レオン
2：マイク
3：ジャック
4：ミン
5：チャン

ガリル

隊長：ミニ
1：サン
2：ナヴェル
3：ウーリヤ
4：ナオ
5：隆司

U・I・C・Sの乗り物

ユニットが接続されているブローニングM2
つフラットベッドハンビー
・50重機関銃を持

UH-60ブラックホーク

アパッチ

F115

F-12ファルコン

F-1

その他

・U・I・C・Sと傘無しの郷

セルゲイ達が今所属している軍はUmbrella・Biohazard・Countermeasure・Serviceという名前だったが

Umbrella・Isolation・Countermeasure・Service《隔離した傘の傭兵》という名前になった。

U・I・C・Sは6人一組のチームが一つの集団として出来ている。ちなみに、チームは誰か一人が死んだとしても、必然的に6人になる。

そして、そのU・I・C・Sの基地は、傘無しの郷である。

傘無しの郷への出入りは、基本変な奴や害をなす奴でなければ自由だったりする。

・通貨

他の場所から来た奴は普通の金でいいが、U・I・C・SにはUIPT(Umbrella Isolation Point)という専用通貨があり、訓練でいい成績を出したり、依頼の報酬としてももらえる。というか、基本働けば貰える。

UIPTはカードへの振込式で、寮に設置されている機械でポイントの出し入れが可能

ちなみに、貯金機能はチーム共通。

・傘無しの郷の建物

U・I・C・Sの寮は3つ建っており、2つのチームが1つの寮を使い、部屋分担は一人一部屋ずつ使っている。

工場では乗り物や兵器が開発されていたり、一部娯楽道具が開発されていたり…

その工場の地下にある地下研究施設では、生物兵器ではなく、人口生物や薬や食べ物が作られていたり…

ちなみに、この研究施設と地下都市は別で、研究施設は工場と医療施設につながっている。

事務所のような談話施設はチーム同士でなんらかの事をする時や、外から来た人との会話用の施設

本部はデカく、郷の5分の1を占めている。

全施設に繋がっている地下都市…現代的な娯楽施設があつたり、兵器を販売している店があつたり、商店街があつたり…大きさとしては、本部の1・5個分なので、そこまで広くない。
ちなみに、大人の…というような施設は無い

現時点での設定集（後書き）

展開速度早いかなー…

あと、何気にネメシスがコメディー担当で拓郎がシリアス担当っぽくなってるのは気のせいだよね？

一方その頃の幻想郷は・・・（前書き）

なんかBIOキャラばかりだったからねw

一応東方でもあるということを忘れちゃいけないからw

・・・まだ出してないキャラを無理やり出します…

一方その頃の幻想郷は・・・

??? Side

彼女はMs・パープルとして活動した後、傘無しの郷を出て、博麗神社の居間に行った。

「えー…本日お集まりいただいた理由は、最近侵入してきた街のことです。」

そう言つて、彼女はまた胡散臭い笑みを浮かべた。

居間に集まっているのは、各場所の代表者である。

人里からは守護者

妖怪の山からは羽が4つ付いている天狗

冥界からは三角巾を着けた女性と白く丸い幽霊のようなものをまとっている少女

迷いの竹林からは美しい少女と赤と青のモノクロの服を着た女性

紅魔館からは幼き主とその従者

魔法の森からは白黒の魔法使いと、人形をまとっている少女

あと、おまけで紅白の巫女

「で？そのまちつてのは何かあるの？」

とてもダルそうに巫女が聞いた。

「ええ、実はその街には伝染病があつてね、妖怪でも感染すると危ない病気なのよ」

「その病気とは？」

今度は天狗が聞いた。

「生存本能しか無くなる、いえ：共食いをする病気よ！」

彼女の答えに、全員が真剣な面持ちになって押し黙った。

「この病気に感染すると、共食いを始めるらしいわ、それと、肉体が腐っても動き回るし、思考も止まってしまう。感染した者は、助かる見込みが無いから、神経の中枢部分：人間で言えば脳ね、そこを壊せば動かなくなるらしいわ、それ以外だと倒れないそうよ」

その話を聞き、想像をしてしまったのかもしれない、幽霊をまわっている少女は涙目になりながらも聞き、幼き主は顔を蒼白にしながら従者にくつついてすすり泣き、従者も顔を蒼白にし、美しい少女も恐怖で顔が歪んでいる。

「他に質問は？」

「その感染経緯を聞きたいわね」

モノクロの女性が平然とした状態で聞いた。

「これはその病気にとっても詳しい人からの情報だけれど、繁殖性が低いから、空気感染は滅多に無いって言ってたわね。だけど、血液感染は逃れようも無いらしいわ。噛まれたり、その感染者の液体を吸収してしまうと、同じようになってしまうそうよ。」

「あと、その感染したときの症状は？」

「感染者は、最初は微熱になって、だんだん熱が上がるそうよ、そして体中に粒が出てきて、体温が急激に下がる。そして死ぬのだけれども、2時間後に再び起き上がって生き血や肉を貪り食べるわ」

「またも”食べる”という単語が聞こえ、居間の空気が凍りつく

「そ、そのまちは、今、一体どうなっているんだ？」

モノクロの女性が頷いている時に、また天狗が震えながら聞いた。

「あなた、さっきからいい質問ばかりしてくるわね」

「茶化しないでさっさと教えてくれないかッ！こっちは真剣なんだッ！」

「あら、失礼…その街は今私の結界で空気すら入れることを防いでいるわ」

その答えを聞き、今度は安堵した空気が流れた。

「あとの質問は？」

他に喋る者がいなくなり、静まり返った神社の居間

「じゃあ、”ラクーン異変”の話はおしまい」

「ちょっと待ってほしいぜ」

話し合いを終えようとしたとき、魔法使いがそれを制した。

「その異変に行くのは誰なんだ？」

この話し合いに出なかった話題、この異変の参加者の話だ。

「それは、幻想郷の端にある”傘無しの郷”から出てくるわよ」

「傘無しの…郷…？」

天狗が疑問に思い、口にした

「あら？ご存知ではなくて？紅い霧異変では一緒になったはずだけ
れど…」

彼女がそう口にした瞬間、天狗の顔が真っ赤になり、拳を震わせな
がら叫んだ

「そいつらに任せるくらいなら私らが行ってやるッ！」

「では、天狗さん達も行くので？」

「違う！私らが解決してやるんだッ！今に見てろッ！」

そう怒鳴って、天狗は居間から出ていき、去っていった。

その光景に、みんな啞然としていた。

いつもならこのような取り乱しが見受けられず、凜々しかったのだが、今回は違った。

そのような謎に、一人応える者がいた。

「ねえ、賢者さん…さっき、”一緒になった”って言ってなかったかしら？」

「ええ、言ったわよ？」

幼き主の言葉に、彼女は平然と返す

「実は、紅魔館に天狗なんて来てなかったのよ」

「まあ！」

幼き主の言葉に彼女は驚いた

他にも魔法使いや巫女からも「来ていなかった」という言葉が聞こえた。

彼女は、自分の言葉に後悔しつつも、話し合いをお開きにした。

一方、妖怪の山に着いた天狗は、階級の高い者を集め、精鋭部隊を作らせて、合戦の準備をさせた。

「全員！合戦に備えろ！我々の仲間の仇を取るぞッ！」

一方その頃の幻想郷は・・・（後書き）

あ…時間がきちゃった…次回は明日か明後日か…はたまたいつかだね^^;

しかし、いろいろとやりすぎちゃったかな…

無理やりが多すぎたしね…

ああ、ちなみにこのラクーン異変に巫女とか魔法使いとか強制参加させるつもり

次回は拓郎達の休日を書いて、ネメシス書いてだな…

U 準備という名の買物（前書き）

帰ってきてアクセス解析してみたら、凄い沢山（？）の人が読んでくれていた。

物凄く嬉しかった。

こんなg d g dな駄文小説でも読んでくれるなんて…

U 準備という名の買い物

翌日、昨晚の泣き声が忘れられず、寝不足気味になりながらも寮の入口に到着した。

「よう！」

そこには、元気な姿のホークと、ガルヴとノルヴァが来ていた。それと、若干不機嫌な健斗がいた。

「なあ、デネブ隊長は？」

この中で重要な人がいなくて、疑問に思った。

「んあ？ああ、多分もうそろそろ来ると思うよ」

「そうk「おい！」…来たな」

会話していたら、隊長がやって来た。

「さあ、行くつか」

隊長の一声で、みんなが楽しそうに話しながら動き始めた。

健斗を除いて

K e n t
S i d e

(うづい、うるさい、ムカツク)

健斗の中では、怒や鬱陶しさが交わり、嫌悪になっていた。

健斗は、いくつもの紛争地帯を回ってきた傭兵だ。父がイスラエル、母は日本というハーフだったが、男性の健斗が産まれたことにより、両親で生活のことについて亀裂が走り、離婚、そして健斗は父に引き取られ、少年兵士という捨て駒として扱われてきた。

罪の無い人を殺したり、敵を殺し、遂には殺しが当たり前のようになってしまった。

常にAKライフルを持ち、体中血に濡れて真っ赤に染まり、戦場の悪魔という二つ名を授かった。

しかし、父親が他界し、母親の元に引き取られた時は、砲弾病にかかってしまった。

敵がいらない平和な場所、そこに紛争地帯を渡り歩いた少年兵が来た。常に周りの気配を察知し、対象を探す。そのようなことに疲れて、孤独を好むようになった。

なーんて、長くて実際にありそうな過去は無く、ただ単に寝不足でイライラしているだけだった。

そんなイライラも、ホークらのハイテンションで、武器屋に着く頃にはすでに消えていた。

S
i
d
e

o
u
t

「おい！AKが置いてあつたぞ！」

「マジで？！あ、こつちにはSVDが置いてある！」

現在拓郎たちは、地下都市の武器屋に来ていたりする。

「おいおい、あんまりはしゃぐなよ、子供じゃあるまいし……」

「別にいいじゃねえかよケンドさんよ！」

この武器屋は、ラクーンでも店を開いていた”ロバート・ケンド”という人の店だ。

彼は、ラクーンの悪夢が始まった直後、市民に無料で武器を提供していた。

その後、店に押し寄せてきたゾンビに食べられて死んだのだが…そこから先は謎だ。

ただ、彼をこの傘無しの郷に連れてきたのはM s・パープルであることは分かっている。

この傘無しの郷の兵器などの素材も、M s・パープルが提供してくれている。

どの素材も、使えなくなつて捨てられたり破棄されたりした物を拾つてきているらしい。

正直、M sパープルは傘無しの郷には必要不可欠な存在だ。

その素材を溶かしたり分解したりして兵器を作っているらしい。

U・I・C・Sは、入隊したときに入隊祝いとして、M4A1とSIGPROが支給される。

その他にも、ホークの言っていた本や、教本や装備品が支給される。だが、別にそれだけ使えつて訳じゃないから、自分で武器や防具や装備品などを一式買って装備することも自由だったりする。

拓郎たちファーストフォースは、前回の事件でいい功績を残してい

るため、それなりには貯まっていた。

カルヴとノルヴァとホークは3人で話しながら銃を見ていたが、拓郎と健斗とデネブはそれぞれ別々に銃を見ていた。

「なあ、ケンド、オススメの銃ってどれだ？」

デネブは聞いた。

「そうだな…確か今度の事件はまたあそこに戻るんだろ？あそこで使う銃か…お前なら、SCARじゃないか？ちよつと持つてくる。」

「ああ、頼んだ。」

やけに親しそうなデネブとケンドに、拓郎は不思議に思い、訪ねてみた。

「あれ？隊長とケンドさんって知り合いなんですか？」

「あ？ああ…デネブはラクーンでの常連さんだったからな。」

「へえ…」

その後、みんなの武器が決まった。

拓郎はG36で、ホークはM14のSOPMOD、健斗は89式小銃、ノルヴァはM249で、ガルヴはAK47を選んだ。

隊長はSCARを選び、バレルをミドルバレルにして、スコープをグリップも付けてもらっていた。

みんなそれぞれ思い思いの銃を買って、満足していたところ、自分たちの残高が半分くらい減っていて、絶望した。

「ハッハッハ、まあ仕方がないさ、またな、”ファーストフォースの諸君”」

次に、装備品を売っているところに来た。

ここでもホークら3人は一緒に行動し、その他の者は単独だった。

装備品も買い、次にドラッグトップスに寄って、何故売ってるかが判らない抗ウイルス剤の”デイライト”を買い、地下都市を出た。

みんなが寮の入口に着いた後、最後の休日（？）に、今度は人里に行こうという約束をして、解散となった。

U 準備という名の買物（後書き）

…やべ、うまく書けてねえ気がする。

……いつも以上に…

演説の後（前書き）

短いけど、ネメシスのあの後を書いてみるか。

演説の後

T・N・E・M・S・I・S Side

ネメシスは部屋にいた。

セルゲイ達が演説をしている間、チルノ達と話をしたり、遊んだりしていた。

そして、セルゲイ達が演説を終えたあと、M・S・パープルやチルノ達は帰っていった。

誰もいなくなった一室で、一人になったネメシスは暇になり、気分転換がてらに外を歩こうと思って立ち上がり、ドアに踏み寄った

「ガッ」

(?)

ドアの近くで、足に何かがぶつかった。

(?...なんだ?この箱)

ぶつかった物を見ると、箱があった。それと、小さな紙

その紙を拾って見てみると、字が書いてあった。どうやら手紙のようだ。

（なにに？）

『息子よ、お前にプレゼントをやるう！U・I・C・S特製の物だ。なあに、遠慮はいらない。出かける時は、これを来ていくといいだろう。』

あと、お前の武器だが、本部の方で預かってる。事件当日、もちろんお前は行くよな？

だから、その日に渡しておく』……）

とりあえず、ネメシスは箱を開けてみた。

中に入っていたのは、ネメシスが前に着ていたロングコートだった。

だが、穴の空いていた部分や、鎖のようなベルトが無くなり、拘束具では無くなったネメシスのロングコートが、そこにはあった。

そのロングコートを着て、外に出ていった。

外は夕暮れになっていた。

ネメシスは、適当にその辺を歩いていたら、後ろから誰かに呼ばれた。

後ろにいたのは、ニコライだった。

「ん？」

「息子殿、ちょっと来てもらう」

「え？え？！ちよっ！」

訳もわからず、手を引っ張られてたどり来たのは、先ほど出たばかりの医療施設：ではなく、その地下の研究施設だった。

「え？ニコライ軍曹！？」

その研究施設の奥に、でっかい真っ白な空間があり、そこにネメシスは閉じ込められた。

その後、その真っ白な空間に、アナウンスが流れた。

『これより、リハビリ及びコートの性能実験を開始する』

アナウンスが流れた後、自動ドアが開くような音が聞こえて、大量のゾンビが現れた。

「う”う”」

「おあゝ」

ものすごい沢山のうめき声と、キツイ異臭が空間に広がった。

『レベル1』

そうアナウンスが言ったが、正直ネメシスは何をすればいいかわからなかった。

『何をしている、早くそいつらを倒せ』

ネメシスは、まず目の前に近づいていたゾンビの頭を、軽く殴ってみた。

「グチャッ」

（え？）

ただの小突きだったのだが、スイカが弾けるように頭が無くなった。

その後、そのゾンビは力無く床に倒れた。

今度は、集まっているところを狙い、腕で横殴りをしてみた。

予想通り、ゾンビの頭が潰れたあと、体と共に吹っ飛び、まだ力の残っていた拳が、ほかのゾンビの頭に当たり、その頭を潰してまた吹っ飛ばし…吹っ飛んでいった先にいたゾンビに当たり、当たったゾンビが倒れる。

「…」

それからネメシスは、ただただ何も考えずに無言でゾンビの頭を潰していった。

『レベル2』

最後のゾンビの頭を潰したあと、今度はケルベロス…犬のゾンビが現れた。

これは、動きが素早くてなかなか攻撃が当たらなかったが、飛びかかってきたときに殴ったり、首を掴み、へし折ったりして全滅させた。

『レベル3』

今度は、エリミネーターというマントヒヒをゾンビ化したような生物兵器が現れた。

これもケルベロスのように容易く殺していった

『レベル54』

あれから大量のプラント42やハンターやブラックタイガーなどのいろいろな生物兵器（B・O・W）を殺していった。

中には、“ガナード”や“ディジュジュ”といった寄生された人間も居たが、容易く殺していった。

3メートルある身長

左胸から露出していながらも、力強い脈を打っている心臓

「は？」

「ッ！」

「グオオオオオオオオオオ・・・・」

262

ネメシスは、自分のようにまた再起動してもらつと困るので、頭を踏み潰して砕き、心臓を抉り抜いた。

『レベル55』

ネメシスは、休憩する暇も無く、その後もまだ続いていく戦闘に疲れながらも、戦い続けた。

その後もレベル170まで戦闘していった。

途中に出てきたT-103や、ティロスなどに苦戦しつつも、なんとかクリアした。

真っ白い空間から出た先に、笑顔のニコライがいた。

ニコライは、「お疲れ様、付いてこい」と言ったあと、出口に向かって歩いていった。

ネメシスは、引きつった笑顔で「あ、ああ」と言ったあと、ニコライについて行った。

外は日が変わり、太陽も空にのぼっていた。

その後、戦闘でボロボロになって汚れたロングコートを、装備品の売っている場所に出し、予備を2つ貰って、医療施設に戻った。

医療施設に戻り、自分の居た部屋に入った。

部屋に入って、寝ていた布団に入って、睡眠に入った。

演説の後（後書き）

・・・やっぱりだめだめか…

感想、指摘、アドバイス、ネメシスの名前等々

何かありましたら、教えてください。

…キャラが序盤と明らかに違って崩壊していることや
東方要素が少ないのは分かっているんですが…中々直らないんです。
ハイ

W e s k e r

新世界の神：？（前書き）

えーっとね、明日と明後日中間テストでした^^；

ので、コレ投稿したら、勉強に逝ってきます。

あと、来年の修学旅行で行く京都のお土産で、木刀が買えるか考え
てきます。

Wesker 新世界の神…？

「アル、奴らが来るよ」

とある研究室のモニター室に、2人の男がいた。

両方とも金髪で、白衣を着ていた。片方は目の下にクマがあり、そして瞳孔が開いていてどことなく狂っているようだった。

しかし、口元がちょっと歪んでいて、焦っているようだった。

「ウィル、心配することはない、俺らの駒がいるじゃないか」

もう片方は、サングラスを付けていて、無表情なので表情がよく判らない。

モニターは、数秒経った後に光景が変わっていく。

二人はそのモニターを見ていた。そのモニターに映っている光景は、とても普通とは思えない光景だった。

とあるカフェを映しているのが一つあるが、数人の人間が、カウンターの前で横たわっている人間に近寄って、介抱しているようなものがある。

でも、近寄っている人間はどれも”部位が足りなかったり、首が曲

がつていたり尋常じゃない”人間ばかりだ。

カウンターの前で介抱のようなことをされている人間も、近寄ってくる人間が頭を上下させる度に痙攣を起こしている。それも血の海を作りながら。

そう、これは”介抱している”のではなく、”食べている”のだ。

ほとんどのモニターではその光景が広がっており、中には悲鳴を上げ、助けを求めながら食べられている光景もあった。

音声は肉が食べられている咀嚼音^{そしゃく}や、悲鳴、銃声、怒声、笑い声などで埋まっていた。

その切り替わっているモニターの中に、あのセルゲイ達の演説している映像もあった。

「フン、小生意気なアンブレラの犬が、主に従えていた犬は主がいなきゃダメなのだよ」

ウェスカーはそのセルゲイに、宣戦布告をした。

すると、その布告を聞いたかのように、セルゲイがモニターからこちらに目を合わせ、ニヤリと笑みを浮かべながら小さく頷いた。

「ウィル、早速駒を集めようと思う…お前の作った奴らも少し借りるぞ…」

「わかった」

モニターを見ながらそう答えたウィリアムに目だけを向けたあと、モニタールームを出た。

W e s k e r S i d e

「…さて、探しにでも行くか」

ウェスカーは、ラクーン警察署の屋上に来ていた。

このラクーンシティーは、彼の能力の『記憶から創造する程度の能力』により創られた場所である。

彼は前世に、ラクーンの郊外にある、ラクーン全体を映しているモ

ニターの着いた車でラクーンの終始を見届けていたのだ。

その記憶を使い、このラクーンシティーを創ったのだ。

ただ、一部を除いて

ウェスカーは屋上から飛び降りた。

その後ろで、ドアの開く音が聞こえたが、気にしない。

飛び降りた後、警察署の門へと向かった

「スタアアズ!!!」

ウエスカーの待っていた駒がついに来た。

前世では、このネメシスを使い、”ジル・バレンタイン”を潰そう
と思っていたウエスカーだが、それは昔のことだ。

今はセルゲイ達に対抗するための駒を集めている。

ウエスカーは、意識を集中させ、ネメシスの中に入ってしまった。

ネメシスは現在、ブラッドの頭を貫いているところだった

一緒にいたジルとカルロスは、手持ちの銃で応戦していた。

『ネメシスよ』

《？》

『私が予言してやろう。これから言っことをやってみてくれ』

《ダレダ？》

『私か？私は神だ。ネメシスよ、その警察署の入口を抑えろ、そして
入らせないようにするんだ。』

ネメシスはRPDと書かれた看板の下にあるドアを見て、そちらに
向かって走っていった。

ジルとカルロスは、その行動の目的を察したのか、門の方に向かって走っていった。

それを追おうとしたネメシスだが、

『やめろ！深追いはするな！』

ウェスカーが止めた。

目的からそれてもらっちゃ困るからだ。

『ネメシスよ、とある場所に向かえ、お前の武器が置いてあるはずだ。その武器を持った後、ある場所に向かえ、そこにはRPDの集団がいるからな、そいつらを皆殺しにしろ』

変わりの目的を与えた。

その目的に賛成したのか、ネメシスは雄叫びをあげた。

その後、ネメシスを駒として使えるようにしたあと、T-103型
や、タナトスRも駒にしようと、行動を開始した。

W e s k e r 新世界の神：？（後書き）

ウェスカー 『意思に侵入する程度能力』

『記憶から創造する程度能力』

あれ？いつもより短くなって、いつも以上に駄文になってる気がする…

敵は、ラクーンにあり（前書き）

えー…見るも無残な駄文を書くことができるようになりましたー^^

平成24年新研究つてのが配られたケド…うわあああ…！！

敵は、ラクーンにあり

『諸君！ついにこの時がやってきた！！』

2日後の早朝、

傘無しの郷の中心本部から、郷全体に響く音で

『今回は、殺した分だけ報酬が増えるぞ！』

誠に不謹慎なことを言い出した。

『生存者を救えば…倍だな』

『ラクーンの殲滅作戦の内容は以上だ。準備が出来次第。ラクーンに向かって任務を開始してくれ。

…ちなみに、嘘について稼ごうたって、そうはいかせないぞ？
ちゃんとカウントしてるんだからな』

こうして、ラクーン事件への解決作業が開始された。

一方、その他の場所でも準備が始まっていた。

博麗神社

「…行かなきゃいけないのね…」

紅白の巫女が縁側でそう呟く。

そして、持っていた湯呑に入っていた残りわずかなお茶を飲み、立ち上がった。

魔法の森

「…正直、行きたくないんだぜ…」

箒に乗りながら、魔法使いが呟く

「あら？魔理沙？」

その呟きが聞こえたのか、偶々そこにいたのか、両肩に人形を乗せている少女が尋ねた。

「どうしたの？」

「そういや、アリスもいたよな？話し合いに。…なあ、アリスはどう思う？今回の異変」

「え？異変だもの、仕方のない…で、済まないことなのよね…」

「…」

二人は何かを思い出し、暗い顔になる。その間、重い沈黙が周りにかかっていた。

「…ねえ、魔理沙…一緒にいけない？」

「…そうだな、よろしくだぜ」

二人は、きのこの生えている道を進んでいった。

紅魔館

「お嬢様、紅茶をお持ちいたしました。」

「ありがとうございます。」

とある書斎、幼き主とその従者は、いつもと変わらない感じだった。そんな時、主は何かに気づいたのか、ハッとした表情になり、恐る恐る従者に聞いた

「ねえ、咲夜」

「なんでしょうか？お嬢様」

「フランはどうしたの？」

「妹様ですか？妹様は…宴会以来見てませ…あ」

「パチエのところに行くわよ」

場所は変わって、地下にある図書館

この図書館は広く、沢山の本と本棚がある。

そこに、一人の少女が本を読んでいた。

髪は紫色、メガネをかけていて服装はどことなく寝巻きに似ている。

「パチエ！」

突然、その広い図書館に幼い声が響いた。

「どうしたの？そんな大声出して」

そのパチエ……”パチュリー・ノーレッジ”は、本を閉じて後ろに振り返った。

その先に見えたのは、視界いっぱいに広がる主の顔

「パチエエエエエエエ！！！！！！」

「ちょー！うわ！」

飛びかかってきた主に押され、倒れてしまっパチエ。

「パチエ、フラン知らない？！」

「えーっと……ちょっと待ってて」

パチエは、立ち上がり、ある本棚に向かった。そこにあった本を一つとってきて戻ってきた。

「おまたせ」

そう言ったあと、本を広げ、何かを唱え始めた。

数秒後、本を閉じた後、パチエが不思議な表情をしながら言った。
きた。

「おかしいわねえ…幻想郷の中にいないなんて…」

「…咲夜、準備はいいかしら」

「いつでも行けます、お嬢様」

こうして、幼き主とその従者も動き始めた。

敵は、ラクーンにあり（後書き）

えーっと…異変参加者はー…

・ U・I・C・S

・ 博麗 霊夢

・ 霧雨 魔理沙

・ アリス・マーガトロイド

・ レミリア・スカーレット

・ 十六夜 咲夜

です。ハイ…

このラクーン異変では、U・I・C・Sの場合チーム別に書いていきます。（前の設定集でてきた奴）

その他は普通ね…

…こつやって自分でフラグ立てておいて失敗するんだよねー…ハア

U ラクーンに突撃（前書き）

隊長：デネブ

1：拓郎

2：ガルヴ

3：ノルヴァ

4：健斗

5：ホーク

久々に思いついた。

展開の速さは仕様です…多分。

U ラクーンに突撃

「揃ったか」

全部隊の集合場所として指定された本部前

そこに、まず最初にファーストフォースが揃った。

他のチームを見てみると、まだ揃っていないまばらな状態だ

「えー…今回、チームごとに一人追加でここの住民が入るそうだ。」

「は？」 「何？」 「誰？」

隊長のメンバー追加発言に、チームは興味深々だった。

この事件の解決にあたって、この幻想郷の人物が追加される…役に立つかわからないが、人手が増えるだけでも十分な支えとなる。

「えー…その人物ってのは、”博麗 霊夢”だ」

デネブが名前を言った後、デネブの後ろから姿を現した。

背丈が低く、見た目は13・14の少女

「……おい、俺あガキのお守りなんぞしねえぞ？」

突然、いままであまり意見を出していなかったノルヴァがそう言った。

「なッ?! あたしは子供じゃないわよ!!」

「ハッ! どうだかな？」

いきなり相性がダメダメそうな感じの二人を無視し、輸送ヘリの方にみんなが向かった。

幻想郷上空、一機のブラックホークが飛んでいた。

『あー…マイクテス、マイクテス…みんな聞こえてるか?』

ホークが操縦席に座っている。助手席には隊長がいる。

隊長が無線機を手に取り、確認をとっている。

その確認に応えた後、隊長が小話を話し始めた。

『ラクーンに着くまで、ちょっとした話をしてやろう…とある日のことだった。』

D e n e b S i d e

窓の外に見えるのは、炎上するビル、走り回る消防車とパトカー、逃げたり応戦する人

「なあ、任務内容を確認してみてもいいか?」

同じ分隊にいる”カルロス・オリヴェラ”が、質問してきた。

「ああ、”ラクーン市内に取り残されている生存者の救出”だそう
だ。」

「ふーん。…ん？おい！マーフィー！あそこのビルに生存者がいる
ぞ！」

カルロスが窓の外を見た瞬間、そう叫んだ。

操縦者がそれを聞き、そのビルの近くまでヘリを寄せた。

（おいおい…あれはもう無理だろ…）

ビルの屋上にやってきたのは、左肩を抑えながら助けを求めている
女性

よく見ると、ゾンビに噛まれたであろう出血が確認できる。

「援護を頼む！」

カルロスは、腰にロープを付け、ヘリから飛び降りた。

その降りた場所にマーフイが行き、M4で援護を開始した。

へりの下から銃声が聞こえる。

（何があっただろうか…いや、考えなくてもわかることか）

女性の出てきた扉から6・7体のゾンビが走ってきていた。

そのゾンビ達の脳天に、1発1発当てていくカルロスの腕は凄いと思えた。

その後、ビルの上にカルロスが降りて、女性と話していたが、女性は噛まれた腕を見せると飛び降りてしまった。

（おいおい、何やってんだよ…せめて死ぬなら頭を潰せよ）

『この後、現地の警察官達と合流して、ゾンビ達を迎え撃っていたが…数が多すぎてな、気がついたら横にいたゾンビに噛まれて死んだ…そして、気がついたらこの隊に入っていた。』

隊長のジョークかと思ったら、ラクーンでの経験の話を言われてへリの中は気まずくなった。

『あーあー…悪いな…着いちまったよ…』

ホークのそのセリフで、みんなが窓の外を見た。

2日も経ったからなのか、悲鳴などはもう聞こえなくなっている。

しかし、何故か電気は通っていたので、それほど暗くない。

『我々の降下地点は”時計塔”だ…2時の方向にある建物だ』

ビルやマンションなどが立ち並ぶ中に、一つ古典的な時計塔があった。

『えーっと…霊夢と拓郎とノルヴァとガルヴはこの前庭から降りろ』

健斗がへりの扉を開け、ロープを降ろす。”ラペリング降下”で降りようだ。

「弾は持ったか?! 忘れ物は無いな?! 行け!!!」

健斗が叫ぶ。叫ぶと同時に、前回買った89式小銃で付近にいるゾンビの脳天に鉛の弾を当てていく

健斗の叫び声に続き、ノルヴァとガルヴが降りた。

次に、霊夢が進み、へりから飛び降りた

((…飛び降りた?!))

「キャッ!」

「うお?!」

素晴らしい反射神経で健斗が霊夢の手を掴み、へりに持ち上げた。

「なんて馬鹿なことをしようとしてんだッ！」

「な、なんで?! なんで飛べないの?!」

「いいからとりあえず降りろッ! 拓郎! こいつを頼んだ!」

そう言いながら、ヘリの下に近づいてきていたゾンビ達を倒していく

『…こちらガルヴ、ゾンビの数が多過ぎる、門を閉じるから援護を頼む!』

拓郎は、ロープを腰に付け、霊夢を抱えながらヘリから降下していった。

『こちら拓郎、霊夢と無事着地した。これより、門を閉じる作業に移る』

霊夢は何が起こったか未だに気づけていない状態のまま突っ立っている。

その間も血肉を求めてゾンビ達が門からぞろぞろとやって来ている。それをガルヴとノルヴァは、単発射撃で、無駄弾を出さずに確実に仕留めていつている。

「拓郎！そいつをどーにかしろ！さっさと行くぞ！」

（なんで俺が…）

ノルヴァは銃声の中でも聞こえる大きな声でそう言った。

その声に霊夢は反応して、お札や針を取り出してゾンビに投機した。

…威力が高いのかなんなのか知らないが、針は直径1センチメートルの穴を開け、札は肉を切断した。

「なかなかやんじゃねえか！この調子で行くぞ！」

拓郎も担いでいたG36を構え、次々にゾンビを倒しながら門に近づいていった。

（こんなに多いのかよ…）

そして、門にたどり着いた。が

「クソッ！こいつ固てえぞ！」

「ハア？！」

『こちらノルヴァー！門が固くて動かない！門の外のゾンビは数が多すぎて進めない！』

門の外に見えるのは、銃声を聞きつけて来たゾンビ…ざっと50・70はいるだろう集団だ。

『…こちらホーク、本部より降下場所が変更された。降下場所は警察署近く、そして集合場所は警察署のメインホールになった。…今ハシゴを降ろした。早く来い』

「ハシゴが降りたぞ！走れ！走れッ！」

ガルヴやノルヴァが射撃をやめ、霊夢も攻撃をやめた。

そして、ハシゴへと走っていく。

「あっ！」

その途中、お決まりのように霊夢が転んだ。

「ツチ、援護を頼む！」

今までは、ゾンビは足が遅いと思っていたが、実際は違う、血肉を食べるために一生懸命追いかけてくるゾンビは、足が使えなくなっている。いても通常の人間が歩くスピード並に速い。

その欲望の猛者達は、見ても分かるほどに霊夢に近づいていく。

「おい！ちゃんと援護をしてくれ！」

ノルヴァが霊夢を抱えると、走ってこちらに向かってきた。

その後ろからゾンビ達が迫ってくる。

かなり近づいていたゾンビはヘリからの援護によって倒れていくが、それでも多いことには変わらない。

ガルヴがヘリにかなり近づいたあたりでAKを構え、また倒していった。

それに続き、拓郎もG36を構えた。

アサルトライフルのサイトを、ゾンビの眉間から少し下あたりに合わせ、引き金を引く。

銃口から飛翔した鉛の塊は、回転しながら真っ直ぐに飛んで行き、眉間を貫通させる。

貫通した後、ゾンビは力無く倒れる。

この作業を、ノルヴァが来るまでやり続ける。

「拓郎、お前は先に行って援護をしてくれ」

もう少しでノルヴァ達がたどり着く時、ガルヴがそう言い出した。

それを4つ返事で了承して、ハシゴを登った。

S i d e o u t

「霊夢！さっさと登れ！」

抱えていた霊夢を降ろし、ノルヴァがそう言った。

霊夢は、頷いてハシゴを登っていった。

「ヒュー…白か…」

「ガルヴ、冗談言っていないでさっさと登れ」

「おーけー」

ゾンビがもうそこまで来ているというのに、余裕をかましていたガ
ルヴにイラつきながら、自分もハシゴを登っていった。

『あー…お疲れさん。これから、近くのビルに向かうぞ』

ホークがそう言ったあと、ヘリが傾いて、動き始めた。

U ラクーンに突撃（後書き）

…駄文エ…

…直んない…アドバイスとかってありませんかね？

やっぱりチームごとに分けるなんて無理ッ！

撤退だ！（戦略的な）

ネメシス後々ゾンビ（前書き）

やっとだ・・・やっと思いついた・・・でも風邪が辛い・・・

サブタイはいつも適当

ネメシスの名前はいつも長い・・・

ネメシス後々ソンビ

T・N・E・M・S・I・S Type C Side

時は、ファーストフォースが霊夢と合流した頃

ネメシスは目を覚ました。

目を開けても、真っ白な空間

ネメシスは未だに医療施設の病室が過ぎす場所となっていた。

ネメシスは、そつと上半身を起こし、窓の外を見渡す。

窓の外は、このネメシスがいる医療施設の一部の他に、滑走路が見える。

人外としての視覚を発揮して、滑走路を見てみた。

一人浮いた服装をした人を混ぜた一小隊がちょうどヘリの方に駆けて行っている。

その他の小隊は、まだ隊員が揃っていないのか、暇を持て余しているように見える。

（ん？待て、なぜ浮いた服装をしている奴がいるんだ？）

善は急げ。すぐさま駆け出した一小隊に視線を戻す。

だが、もうへりに乗って空に飛んでいた。

とりあえず、その疑問は頭の隅っこによせて、ネメシスはセルゲイのところに向かった。

S
i
d
e

o
u
t

Z
o
m
b
i
e

S
i
d
e

「う” あゝヴォーウィーオ！うっえうっえうっえ W W W」

ラクーンが幻想郷に入ってから一週間半、ラクーンの住人達に変化があらわれた。

変化と言っても、一部のやつらだけだが・・・

「ボォィア・・・グァエオ・・・アアアア・・・」

とあるラクーンのバー・・・

そこには、中々シユールな光景が広がっていた。

あるゾンは隣に座っているゾンと話し合ったり。

あるウェイターゾンは、料理を作ったり運んだり。

またあるゾンは賭博をしたり・・・

・・・そう、一種の”ゾンビバー”が出来ていたのだ。

「ヴォウ・・・グヴォエドオ・・・」

訳：うえ・・・内蔵が落ちちまった・・・

「ウウウウ・・・アアアアオイエ」

訳：うわあ・・・またすっちまった。

「ポポオウイ」

訳：肉一個くれ

何を言っているかは理解できないが、意思が伝わればどつといつこ
とはない。

「ボア・・・」

訳：なあ

「オオエ・・・ウオ？」

訳：なんだ？

「ヴォイオエア？」

訳：俺ら何も食べなくてもよくね？

何かを思いついたのか、ただの疑問なのか、突然ゾンAがよくわか
らない事を聞いた。

「バアア・・・ヴ」

訳：まあ、そうだな

よくわからないゾンBは、曖昧な返事で応えた。

そのゾンBの返事で、見てわかるほどゾンAが期待の眼差しをゾンBに向けた。

「ヴァア・・・ゴ、ガア」

訳：もしかして俺らって、不死身じゃね？

「ガゴイ・・・ヴァアア」

訳：バカ、頭が吹っ飛べば終わりだ。

今度は、ゾンBに現実を知らされて、見てわかるように落ち込み始めた。

「ヴォヴェゴ・・・ウエウエウエ」

訳：だよな・・・ラクーンから出てみたかったなあ・・・

「ヌ・・・ソドドヴォ？」

訳：ん？それはできるんじゃないか？

そしてまた喜び始めたゾンA

どうやら、幻想入りしたせいか感情を手に入れたようだ。

「モガ、ヴォオウ」

訳：じゃあ、折角だからみんなで行こうぜ

ゾンBは雄叫びをあげ、みんなから注目を得た後、ラクーンを出ることを提案した。

その後、ゾンビバーに居たゾンビの半数が賛成して、ピクニック気分でバーを出て、幻想郷へと歩み始めた。

S
i
d
e

o
u
t

場所は戻って傘無しの郷

ネメシスはセルゲイに会った後、いきなりデルタフォースにゲストとして入れられ、

装備を整えさせられた後、デルタフォースと共にヘリに乗って郷を飛び立った。

セルゲイがネメシスに言ったことは、目的地とデルタフォースにゲストとして入ることだけ

何も分らずいきなり飛ばされたネメシスは、未だに混乱していた。

ネメシス後々ゾンビ（後書き）

ハイ・・・ぶっちゃけ投げやりです。

思いついたはいいけど、途中からグツチャグチャ・・・

ヤバイな・・・ありえないほどの駄文だ・・・訂正できるようにな
ったら訂正しなきゃ。

あ・・・東方要素が含まれてないや・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6098w/>

ネメシスと仲間たちが幻想入り

2011年11月27日10時52分発行